
LOST COIN -head-

早村友裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LOST COIN - head -

【Nコード】

N3660C

【作者名】

早村友裕

【あらすじ】

ねえちゃんにもらった『探索者』という仕事をこなすため今日も街を駆け回る。いつもと同じ明るい日差しと暖かな風。でも、その日はいつもと違った。街の片隅で見たことのないヒトに出会った。きつとそれが全てのハジマリ

SECT・1 はじまりの朝

まず、服を着る。

とりあえず紺色ハイネックのアンダーウェアを着て、開け放った窓から入ってくる風が暖かだったから気分は春色、淡いグリーンの短衣を引き出しから取り出してかぶった。ついでにその裏ポケットにいくつかクナイを忍ばせておこう。

それから、太ももが半分くらい出る短いワーキングパンツを穿くと、茶色の皮ベルトには短刀と商売道具の入った鞆を提げた。

最後にあまり使わない鏡台においてある黒い布の籠手を肘までしっかり上げて手の甲で紐を結んで固定した。

鏡を覗き込むと見慣れた顔が映る。自分でそう思ったことはないが容姿には恵まれたとよく言われる。長い睫毛が縁取るくつきりとした二重の黒瞳。高くはないがバランスの取れた鼻と桃色の唇。うまく整えればかなりのものになるらしいがそんなことに興味はない。「べーっ」

鏡の中の自分にあかんべえしてから肩より少し長い黒髪を結んで水色のバンダナの中にしまった。

いつものように、丈夫なブーツの靴紐をしっかり結んだら準備はばっちり。

「さてと、行こうかな!」

今日も仕事の始まりだ。

「いつてきます!」

誰もいない部屋に向かって大きな声で宣言してアパートの一室から飛び出した。

春から夏に向かう季節は花よりも若葉が目立つ。

淡い緑のあふれるこの季節が好きだ。暖かな風の匂いも柔らかな日差しも心の中まですんなりと馴染んでくる気がする。丁寧には言いがたいけれど、それなりに手入れしてある道沿いの花壇も緑と赤白黄色の花であふれている。

どこまでも突き抜けていく青い天井を白い雲が染め抜いて、植木鉢には若葉の萌黄色を背景に小さな白い花が密集して、それから灰色の石を敷き詰めた道がまっすぐに伸びて目的地まで導いてくれる。この世界は鮮やかだ。特に今は 自分の生れた季節は知らないが、こんな風に明るくて爽やかな朝だったら嬉しいなと思う。

「いい天気だあ！」

なんのひねりもないそんな台詞を大声で叫んでみてもいい。だって仕事は簡単だ。

世間一般で『探索者』と呼ばれる者、それが自分の職業だ。情報屋の下請けというのが一番分かりやすい説明だろう。

街を周回していればいい。いろんなものを見て、いろんなことを聞いて、一日の終わりにそれを雇い主に報告する。ただそれだけが仕事。

自分にとってそれは散歩とほぼ同義だった。

まっすぐに続く灰色の石畳とレンガ造りの建物に従って、朝は閑散としている街の飲み屋街を駆け抜けた。

目的地の店の階段を駆け下りると扉をノックもせずに関け放って慌しく飛び込む。

店内には数名が座れるカウンター席の他に4人がけのテーブル席が3つ。煤けたように黒ずんだ木の素材は薄暗いバーの雰囲気になりたりだ。

そのカウンターの向こうに淡いブラウンの髪をなびかせて食器を洗っている女性がいる。

「おっはよー、ねえちゃん」

「今日は早いわね、ラック」

まるで気まぐれな一匹の猫のように、金に煌く瞳を持つこの女性は自分の雇い主だ。腰まであるストレートのブロンドから見え隠れする白く細い首筋から胸、腰にかけてのラインが絶妙で街一番の妖艶な美女だと評判だ。

が、美女というよりは悪女という表現が一番ぴったりくるなあといつも思っている。

いや、そんなことを言ったらこの世から存在を消されてしまうかもしれない。

今日は体のラインを全面に押し出した真紅のワンピースに身を包んだ彼女を敵に回せばどうなるか、そんなことわかりきっている。

それを知ってか知らずか夜には酒場になるこの店の常連客は多いのだが。

朝だというのに薄暗い店内のカウンターに座ると、彼女は目の前にミルクのカップとエッグトーストの乗った皿を置いてくれた。

「ありがとうございます！」

「はいどうぞ」

夜中に店を開けているのだから毎晩徹夜だろうにそんな疲れは見せずいつも朝食を出してくれる。そんな情報屋の彼女がすごく好きだから『ねえちゃん』と呼ぶ。それが自分の示せる精一杯の親愛の情だから。

しかも、行き場もなく何も持たなかった自分を拾って職まで与えてくれた。

「ラック、今日は大事なお客さんが来るの。夜はお店を開けないからお手伝いはいいわ。その代わり、報告は早めに来て頂戴」

「はい」

たまにこういう日もある。情報屋の方の上客が来るときは夜に店を開かず、その客の接待に専念するのだ。

夕方の報告後この店の手伝いもしている自分はその日、お休みをもらうことになる。

エッグトーストを頬張る自分を見て、ねえちゃんはほんの少しだ

け遠い目をした。

どうしてだろうと首を傾げると猫の目を細めてふふ、と妖艶に笑った。

「もうラックが来て3年になるのね。あなたはいつたい幾つくらいなのかしら」

「んー、わかんね」

出会った時、自分は本当に何も持っていなかった。

財産も肉親も記憶も、もちろん自分の名すらも

『ラック』という名をくれたのはねえちゃんだ。古い言葉で『幸福』という意味を持つらしい。

この名前はとても気に入っている。

「もういい年頃の女の子だとは思っただけど……いつまでたってもそんな格好しかしいし。もったいないわあ」

「いいじゃん。おれは気にしてないし！」

「『おれ』って言うのもそろそろやめなさい。街のみんなはあなたのこと男の子だと思ってるわよ？」

「別にいいよ。気にしてないし」

「もう。そのうち好きな男の子ができたって知らないんだから！」

「そんなことは絶対ないって！」

軽快に笑って目の前で手を振ると、ねえちゃんは深いため息をついた。

自分の性別よりねえちゃんの年のほうがよっぽど不詳だ。

そんなことを言いかけて、命が惜しいと思いとどまる。

「まあいいわ。あなたの好きにしなさい」

ねえちゃんのため息が終わったところでちょうど朝ごはんも食べ終わったし、街に出ることにしよう。

がたん、と席を立つとねえちゃんが小さな皮袋を投げってくる。

受け取った時にちゃりんと軽い音がした。

「昼と夜のごはんのお金よ。少し多めにしておいたから何か美味しい物でも食べなさい」

「わーい、ありがと！ ねえちゃん大好き！」

嬉しい。今日は何を食べようか？

久しぶりに甘いケーキでも買って帰ろうか。ソフトクリームもいいな。

「好きなのは私じゃなくてケーキでしょう？ あなたは本当にわかりやすいわね」

どうも妄想が顔に投影されていたらしい。

苦笑したねえちゃんに破顔するとひらひらと手を振ってサヨナラした。

SECT・2 はじまりの出会い

店を出て、ようやく動き始めた街に出た。灰色の石畳は街のメインストリートへとつながっている。

ここからは仕事だ。

感覚のスイッチを入れた。

視野を広げて、耳を澄まして、それから街の様子を肌で感じる。少しでも、何か変化していないか？違和感はないか？

自分がバカなのはわかってる。記憶力はないし理解力も推理力もほとんどない。ただ一つだけ自慢できるのは『勘がいい』っていうことだ。

世間ではなんて言っただろう？

ああそうだ、『洞察力』ってやつだ。

少しの違いに気付ける。違和感を逃さない。

それは探索者という職業にこの上なく適した能力だったらしい。だから自分は情報屋のねえちゃんに拾われて、ちゃんと仕事をして生活できている。

それはすごく幸福で運のいい事なんだろう。

「んんんんんんんんんんんん」

そんな風に鼻歌を唄いながらゴキゲンでメインストリートに入るところで、開店準備をしているカフェのマスターが声をかけてくれた。

「よお、ラック」

くるりんとした左右のヒゲは今日も立派に空に向かっていて、リンゴみたいなお腹は相変わらずたゆんたゆんと揺れている。

白いエプロンが朝日を反射して眩しい。奥さんが洗濯したのか、水色チェックのシャツはパリッとしていて爽快だった。

「今日もご機嫌だな」

「そうだよ。今日は久しぶりにケーキ買って帰るって決めたんだ」

「そりゃあいい」

笑うとお腹がたゆんと揺れる。

そのお腹も自分のお気に入りだ。

「だからマスター、夕方くらいにフルーツケーキ残しとして！イチゴいっぱいのはやつ！」

「お前の分は特別に作っといってくれって言っといてやるよ。」

「わあーい！ ありがと、マスター！」

マスターの奥さんが作ったフルーツケーキもお気に入り。

この街はお気に入りでいっぱいだ。ねえちゃんの気まぐれ猫みたいな金の瞳、道沿いの花壇、マスターのたゆんとしたお腹、フルーツケーキにソフトクリーム。それからメインストリートを吹き抜ける暖かい風。

「今日もがんばるぞ！」

マスターともサヨナラして、飲み屋街の灰色からメインストリートのベージュの石畳へと変化していく朝の道を駆け抜けた。

とにかくよく見るのよ、それから、少しでもおかしいなと思ったら書いておきなさい。たとえばほんの少しの違いだったとしてもあなたには気付くことができるはずよ。

それはねえちゃんが何度も何度も繰り返す言葉だ。

だから、自分の持つ全ての感覚を使っってよく見る。

いつもの街の中に少しでも違和感がないか。おかしいところはなにか……

昨日まで咲いてなかったけど、オレガノが咲いてる。きれいな薄紫の花だ。

あ、ここの壁ちょっと壊れたんだ。誰かぶつかったのかな。

本屋のペット、カラフルインコがいつものように店の前の止まり木でがんばっている。運動不足ででっぷりとしたお腹がカフェのマスターにそっくりだから自分は勝手にちびマスターと呼んでいる。

「や、元気が、ちびマスター」

「くわああ！」

「ちよつと痩せたんじゃない？」

「きいつ、くあつ！」

うるさい、といった感じで威嚇してくる。

あんまり構い過ぎると頑丈な嘴でつつかれたり、太い爪で引つかれたりするから気をつけなくちゃいけない。これまで何度もやり過ぎて痛い目を見ている。

「ちびマスターはいつもつれないな」

にこつと笑ってバイバイ手を振ったが、ちびマスターは相変わらず機嫌悪そうにふんと鼻を鳴らしただけだった。

カラフルインコのちびマスターを見送って、メモをかばんから取り出した。とにかく見つけたことは全部書く。

オレガノが咲いたこと、壁の破損。それから少し痩せたちびマスター。

一日の最後に、このメモを見ながら見たこと全部ねえちゃんに報告する。

メモし終わってふと顔を上げると、民家の壁に少し欠けている部分を発見した。

「ここの壁も壊れてるのか。」

少し視線を上げると二階部分の屋根が壊れて、拳大の破片がいくつも道に転がっていた。

あれ、あんなところも？なんで？あんな高いところ、誰も届かないよ？

「……………」

おかしいな。

ふと足を止める。

このあたり一帯の家で壁の破損が多すぎる。
なぜだろう？

「めもめも」

自分で考えてもわかるはずない。ねえちゃんに考えてもらおう。

鞆からメモを取り出してとりあえず書き留めておく。

「本屋の壁と、八百屋の鉢植え、果物屋の屋根……」

足を止めずに破損部位の簡単なメモとスケッチをとる。

走りながら、周囲を見渡しながらのメモにも慣れた。

「よし」

3年前に拾われてから、いろんなことが出来るようになった。

ねえちゃんに読み書きを習って、生活の仕方も習って、それから戦い方も学んだ。それなりに自分の身を守るくらいには強い。それがわかっていいるから、少し危険だなと思ったところにも飛び込んでいける。

そうやっていつも探索者としての仕事をこなしてきたのだ。

辺り一帯の破損を書き留めて、次は別の道を駆け回る。

犬の散歩じゃないけれどいつも歩く道順は決まっている。一筆書きで街中を一掃できるようにとねえちゃんが考えてくれた道筋だ。

ところが、今日はそううまく行かなかった。

「うっわあ、ひどいなあ！」

これまで見てきた破損と比にならない、大きく崩れた壁の跡を宿屋の横筋に見つけてしまったからだ。

いつもは素通りする裏道に入る。

朝の光が差し込んでいない。かび臭いような湿っぽい空気が鼻の奥をつん、と揺らした。

それに混じってきた匂い。

「なんだろ」

この匂いは知っている気がする。あんまり好きじゃない匂いだ。

「鍛冶屋のゼルと同じ匂い……」

金属。

鉄

「あ……」

一瞬目の前が真っ赤に染まる。

むせ返るような匂いと、声も出せない恐怖が一瞬フラッシュユバツクした。

思わずくらっとして地面にしゃがみこむ。

「この匂い……血だ」

自分は血がキライだ。

前にねえちゃんにその話をしたら、きつと過去に何か血を嫌うきつけになつた出来事があるんだろうと言われた。記憶がないから分からないが、そんなシーンが白昼でもたまたま目の前をよぎることがある。

そして今、微かだがこの路地から確かに血の匂いがして、一瞬だけ何かがフラッシュユバツクしたのだ。

とりあえず調べよう。

ゆっくりと立ち上がった。崩れた壁に半分ふさがれた細い裏道の奥を見つめる。

この先は、行き止まり。本屋の扉が行く手をふさいでいるはずだ。その細道の奥に、何か白い塊が見えた。

「なんだろ……」

ゆっくりゆっくり近づいてみる。

近くで見ると意外と大きい。

「あつ……」

これ、ヒトだ！

一瞬歩みを止めた。

心臓がドキドキした。

そのヒトの顔には、薄暗い路地の最奥でもはっきりわかる青みがかつた白銀の髪がかかっていた。聖職者のような真っ白い服に点々と赤い花が咲いていて、これがさつきから漂うキラいな匂いの元だという事はすぐに分かった。

こういう時はまずねえちゃんに知らせるのがよかつたんだろう。

でも、その時は全く思いつかなかつた。

SECT・3 はじまりの謎

恐る恐る近づいて顔を覗き込んでみる。

「わぁ……」

まるで昔の人が作った彫刻のように端正な顔。瞬きしたらバサリと音のしそうなほど長い睫毛が透き通るように白い肌へ影を落とすていた。唇にかすかに残る血痕が白い肌の中で不自然なほどに浮かんでいる。その赤と白の対比はひどく印象的だった。

「きれい……男のヒトかな？」

ヒトを見てきれいだと思ったのは二回目だ。

一番目は情報屋のねえちゃん。

二番目はこのヒト。きつと年は自分より少し上くらいだろう。顔の造形も、髪の色も、透き通るような肌も見ることがないほどに美しく整っていた。

何か大変なことがあったら自分でなんとかしようとせずにくすぐねえちゃんに知らせるといふ二人の間の決め事をすっかり忘れて、このきれいなヒトに夢中になった。

あまりにきれいで触ってみたくなくて、欲望のままに手を伸ばした。

そっとシルバーブルーの髪に触れる。

思ったよりずつと柔らかかな感触に驚いてさつと手を引っ込めた。

耳が隠れるほどだった青銀髪が揺れて、深紅のピアスが見えた。

その赤は白い服に咲いた血の花のように視線を釘付けにする。白い肌と赤いピアスの対比にくらりとした。

そのヒトの美しさに見とれて、しばらくぼうつと呆けて、でも、すぐにまた手を伸ばす。

今度は頬。生気のない、それこそ彫刻のように透き通る肌にそつと触れてみた。

が、次の瞬間！

「！」

そのヒトが目を開けた。

あっと思う間もなく伸ばした左腕に焼けるような痛みを感じる。

「痛っ……」

視界の隅を銀色に光るブレイドがかすめる。どうやらこれが武器らしい。

とりあえず距離を置いた。一足飛びに間合いをきって、負傷していない右手で短刀を抜き放つ。

左肘の辺りから甲にかけて血が伝う感覚があった。じつとりとぬれた籠手が腕にまとわりついてくる。けっこく深くやられたみたいだ。手首近くまで切られてしまっているだろう。だが、確認している余裕はない。

ずきんずきんと疼く左腕をかばって、その銀髪のヒトと対峙した。瞳の色は濃い群青だった。白い肌が目立つその黒に近い深い色の瞳には何も映っていない。まるで見てはいけな世界を覗き込んでしまったようだ。

怖い。

背筋にゾクリと何かが這う。

路地裏に倒れていたそのヒトは、目を閉じていた時から想像もつかなくらいに鋭い群青の瞳をこちらに向けていた。年は自分よりいくつか上だろう。

右腕の手甲からまっすぐに銀色のブレイドが飛び出していた。聖職者のような純白の服と物騒なそれは全く似つかわしくない。

しかし、あれが自分を傷つけた武器なのだろう。相手の間合いがわからない以上うかつに近寄れない。

汗が額に粒を作った。

いったいどれだけそうやって睨み合っていたんだろう。

「何者だ」

低い、よく通る声が響いた。

目の前のヒトから発せられていることはすぐ分かった。

「……………」

返答できずにいると、そのヒトはブレイドを自分に突きつけた。

「『光』はどこだ」

「え？」

「言え」

ガギーン！

体が勝手に反応して攻撃を受けていた。下から切り上げられたブレイドをかるうじて短刀が受け止めていた。

すごい力だ。このままじゃ……………」

「吐け！ 『光』の居場所！」

「知らない！」

渾身の力をこめて右手一本でブレイドを弾く。

ぼたた、と指の先から血が流れ落ちた。

もう次の一撃は受けきれないだろう。

どうする？ どうしたらいい？

刃は目の前に迫っていた。

受けきれない！

反射的に目を閉じた。

が、予想していた痛みは襲ってこなかった。

代わりに、

「がっ……………」

鳩尾に強烈なショックを食らってその場に倒れ付した。

そこまでしか、覚えていない。

SECT・4 はじまりの危機

左腕の痛みで目が覚めた。

うつすら目を開けたが、あたりは暗がり様子がよくわからない。

「目が覚めたか」

低くてよく通る声が出て、目の前の空間にヒトがいることに気付いた。

シルバールーの髪と深い群青の瞳、それに透き通るような白い肌。自分が気絶する直前路地裏に落ちていたヒトだ。

少しずつ暗闇に目が慣れてきた。それでもここがどこなのかまでは分からない。暗くてこの空間の広がりやどこまであるのかが見えないし、周囲に何かがある気配もない。ただ、自分の背中に木か柱か、何かそんな形状のものがあってそこに自分が寄りかかっていることだけが分かった。

改めて見ても、暗闇の中でもそのヒトはやっぱりきれいだった。

まるで夜光蝶の燐粉をまとったみたいにそのヒトの周りの空間だけ輝いて見えた。

「きれい……」

思わず呟くと、そのヒトは自分のほうに歩み寄ってきてぐい、と髪を引き上げた。どうやら自分が頭に巻いていた水色のバンダナはどこかで落としてしまっていたようだ。括っていたはずの黒髪は肩に落ちていた。

目の前に群青色の深いブルーアイが迫る。

「何を言っている」

動こうとしたが動けなかった。どうやら後ろ手に縄でくくられているようだ。動いた瞬間左手と首筋に鋭い痛みが走った。

「ぐっ……」

血の匂いがする。自分のだろうか、それともこのヒトの？

キモチワルイ

「あきらめる。印もつけた。もう逃がさない」
ずきん ずきん

左腕と首筋の痛みを耐えて、何とか銀髪のヒトを見上げた。
が、銀色の髪を視界に入れた次の瞬間、気を抜けば意識が飛びそ
うな激痛が全身を駆け巡った。

血の匂い。

全身を襲う痛み。

薄暗い空間に、銀髪のヒトが一人

「うあああああ！」

地面が崩れ落ちるような恐怖が襲った。心の内が抉り取られるよ
うな感覚と吐き気を催すほどの嫌悪感、目の焦点が合わなくなるほ
どの衝撃が同時に自分の中で爆発した。
痛みも忘れてがむしゃらにもがいた。

「あああああ」

暗闇に浮かぶ銀の髪がこちらに近づいてくる。

何かの映像が目の前に飛来する。

「うあ……く……」

暗闇に光るブレイド、むせ返るような血の匂い、全身を襲う痛み、
そして……浮かび上がった、銀髪のヒト。

脳裏に焼きついた光景と体が覚えている感覚が目まぐるしく全身
を駆け巡った。

「いやああああ！」

「いったい何だ！」

そのヒトの一喝で、はっと我に返った。

「はあ……はあ……」

激しく心臓が脈打っている。頭がくらくらする。気分が悪い。吐
きそうだ。

自分の体が傾いたのがわかった。

辛うじて縛られた手がつつかえとなつて倒れるのは免れたが、お
かげでひどい痛みが襲ってきた。

だが、それに抗う気力は残っていない。
何キ口も全力疾走した後みたいに疲労している。体が重い。力が
入らない。額に大粒の汗が浮かんでいる。

目を開いているのも億劫だ。
いつものフラッシュユニットとは比にならない強烈さで、自分の体
力をすべて奪ってしまった。

荒い息を整えていると、
「いったい何なんだ……貴様」

その銀髪のヒトは舌打ちして自分に背を向けた。

それは自分が聞きたいことだ。

いったいどうしてこんなことになっているんだろう？今日はいつ
もと同じようにパトロールして、帰りにケーキを買って食べる予定
だったのに。

「おかしいな」

もう、何がなんだか分からない。

この銀髪のヒトは誰なんだろう。探している『光』って何なんだ
ろう。どうして自分はこのヒトに嫌われているんだろう……？

「くそつ。」

銀髪のヒトは闇の中で少し震えていた。

「『光』、どこだ……どこに行つたんだ……」

ああ、『光』っていうのはこの銀髪のヒトの大事なヒトなのかな。
自分にとってのねえちゃんみたいに。

ねえちゃんがいなくなつたらきつと自分もこうやってがむしゃら
に探すんだろう。

でも、どうしてその人のことを自分が知っていると買ったのかな。
目覚めたとき、目の前にいたから？ただそれだけ？

「ちくしょ……」

低くてよく通るつぶやきが悲痛なものに変わった。

「探してるのか……？『光』ってヒト」

荒い息の下でかろつじてそんな台詞が出た。

「レメゲトンが！ 貴様に関係ない！」

その瞬間に群青の瞳で射抜かれた。

「レメ……？」

「昨日のやつ仲間だろう！ 貴様は生かしておかん！」

銀髪のヒトは蒼白な顔で立ち上がった。

そうだ、このヒトからは血の匂いがしていた。どこか怪我をしているはずだ。顔色も悪い。

「怪我……してんじゃないか？」

「貴様に関係ない」

先ほどと寸分違わぬ台詞を吐いて、銀髪のヒトは自分を睨み付けた。

さらりと銀髪をかきあげて、耳の横に手を置いた。どうやら耳を澄ましているようだ。

「そう……昨日のやつとは無関係か」

「え？」

昨日？ どういうことだろう。

「貴様が持っていたのはどうやらロストコインらしいな。何も知らないわけだ。が……」

「！」

よく女らしくないと言われるが、唯一肌身離さず持ち歩いているアクセサリーがある。

それが、コインをトップにしたペンダントだった。

見たことのない複雑な文字が周囲に刻まれたメダルは、中心に何かのモチーフであるう幾何学模様が掘り込まれている。

何という金属か知れないがくすんだ黄金色で鈍い光を放っている、用途の知らないコインだ。

それはずつと胸元にしまっただけであるから、このヒトが知っているはずはないのだ。

「ちようどいい。目覚める前に片付けてやる。コインは破壊する！」

「なん……ぐっ！」

なんで知っているんだ、と聞こつとしたが、その前に口を塞がれた。首筋に手がかかる。

何をする間もなく、目の前が暗くなった。

SECT・5 ふたたびの出会い

目を覚ますと、今度は明るい日差しに包まれていた。

ああ、生きてた。

虹色の光にはつと天井を見ると、大きなステンドグラスが空の光を虹色に変えていた。

大理石の床の感触がふくらはぎ辺りでひんやりと心地よかった。

3人がけの木椅子がずらりと並んでいて、その向こうには純白の像が安置されている。

銀髪あのヒトの姿はなかった。

いったいどこに行っただろう？

「教会……かな」

街に教会はない。それはよく知っている。どうやらここは街から外れた場所のようだ。

昨日のヒトが自分をここまで運んできたんだろう。

ぼんやりと夜のことを思い出しながら腕を引いてみると、案外簡単に縛っていた縄から抜け出せた。昨日暴れたせいで縄が緩んでいたようだ。

痛みを気にしなかったのがよかったらしい。

今もまだ血が止まっておらず痛みが引く気配もない左腕をかばいながら立ち上がろうとすると、

「痛いっ」

今度は首筋に鋭い痛みを感じた。

どうやらそこも怪我をしたらしい。首筋の後ろから背にかけて・
・自分では見られないが、この感じからするとそれほど深い傷ではなさそうだ。

よろよろと立ち上がって出口に向かう。足を怪我していないのは不幸中の幸いだ。

黒い扉にようやくたどり着き、体を預けるようにして扉を開いた。

重い。こんな体じゃなかったらきつと軽く開けられるだろうに。
ぎい、と重そうな音を立てて扉が開いた。

とたんに暖かな空気と柔らかな日差しがふつと体を包み込んで、
少なからずほっとした。

何だ、気づかないだけでやっぱり緊張してたんだ。

つたない足取りで数歩進み、教会の前庭に広がる柔らかな芝生に
崩れるように膝をついた。

ヒトの気配がない。教会の中もかなり埃で汚れており、長い期間
放置されていたのであろうことは想像がついていた。

何より、見渡した限りでこの建物の周囲は深い木々で覆われてい
る。きつと上空から見ると不自然なくらいにポツリと浮かんだ孤島
とも呼べる位置にあるんだろう。

要するにヒトが来る要素がないのだ。

それはすなわち、自分が今一体どこにいるのかわからないという
こととも同義だった。

「どうしようかなあ」

痛い首筋を地面につけないように横に寝転んだ。

全身の関節が鈍く痛むのは柱に括られてずっと不自然な体勢でい
たせいだろう。

怪我自体は左腕以外たいしたことなさそうだ。籠手はすでに血で
固まってしまっていて、今さら外せそうになかった。

でも、何よりとりあえず回復が先決だ。

こんなに大きな怪我をしたのも、ぜんぜん知らない土地に放り出
されたのも初めてだったが、なぜか自分がどうすべきなのかという
ことを容易に思い浮かべることができた。それどころかいつもより
冷静で、普段ならねえちゃんに考えてもらおうような小難しい状況分
析さえ出来てしまいそんな気がする。

それは不自然なまでに自然だった。

目を閉じると肌と耳とが鋭敏になる。

鳥の音がする。風の音が聞こえる。空の色まで肌で感じ取れる気がした。

「気持ちいい……」

一瞬だけ痛みを忘れた。

心地のよい風に全身を預けると自分が空を飛んでいるような気持ちになれた。

「……」

でも、考えなくてはいけないことはいっぱいある。

昨日の銀髪のヒトのこと。怪我してみたいけど、いったい何があつたんだろう？何で自分に切りかかってきて、殺すなんて言っただらう？

それから、コインのこと。自分の持つコインに一体どういう意味があるんだろう？しかもあのヒトは破壊する、と言った。何か悪いことでもあるんだろうか……？

なるべく体を動かさないうつ注意しながら胸元からペンダントを取り出して、そのコインをまじまじと見た。

これは3年前ねえちゃんに拾われた時、自分が唯一持っていたものだ。だから、肌身離さず持ち歩いている。だがこれがいったい何だと言っただらう？

コインの幾何学模様を見つめているのも辛くて右手の力を抜くと、ころりとコインが草むらに吸い込まれた。

ついでにだらりと全身の力を抜いた。

それにしても本当にあれはいったい誰だっただらう。とてもきれいなヒトだった。それだけは確信を持って言える。たとえ殺されそうになったとしても、その点だけは譲れない。

そう、できれば『光』というヒトと会えてたらいいけど。

そんな風にあのヒトのことを思っていたせいなんだろうか。

微かな音にふとその方向を向くと、青銀髪のヒトが立っていた。

SECT・6 ふたたびの謎

どうやら周囲の深い森を抜けてきたらしいそのヒトは、聖職者のような真っ白い服をまとうていた。血の匂いはしなかったが、その端正な顔立ちには見覚えがある。

「あ」

間抜けな声が出た。

でも、すぐに気づく。

別人だ。

髪の長さが違う。あのヒトは耳が隠れていたけど、このヒトは耳が半分くらい出ている。切ったかもしれないけど。

目の開き具合も違う。あのヒトは鋭くてパツチリしてたけどこのヒトは半開きだ。そんなのいくらでも変えられるけど。

でも、何より雰囲気が違う。纏っているオーラの色が違う。

「おかしいな、いないや」

低くてよく通る声も似てる。でも微妙に違う。このヒトのほうがほんの少しだけ穏やかで澄んでいる気がする。

口調も少し違う。

「『音』を探さないとだね」

でも、同じだった。何もかも。青を一滴溶かし込んだ銀色の髪も、覗き込むことを許さない深い群青の瞳もあのヒトと一緒だった。ただこのヒトは耳が半分くらい出ている、ピアスの色が青色だった。

しかしながらそのヒトは自分に全く興味がないみたいだ。

自分の方を見ている様子はなく、でも少しずつこちらに向かってきた。

近くで見るとすごくよく似ていたが、やっぱりぜんぜん違う。あのヒトが持つオーラが深紅ならこのヒトは深青だ。穏やかで冷やかな深い水の色。

痛いのを我慢して起き上がった。

その動きにさえ気づいていないのか、一度たりとも視線がこちらに向けられることはない。

じっと見つめる自分とは裏腹に、そのヒトの瞳にはまるで自分など映っておらず背景の一部であるかのように全く認識の範疇にないようだ。

だが、ふいに群青の瞳がこちらを向いた。

「んあれ？」

でも、目が合わなかった。どうやら自分が首から提げているコイソのペンダントを見ているらしい。

どうも自分と会話したりする気はないみたいだ。

と、目の前の銀髪のヒトはひよい、と上から自分の首筋を覗き込んだ。

「ああ、印がついてる」

その瞬間、初めて眼が合った。

「君、僕に会っただろう（……………）」

返事する暇もなくいきなりそのヒトに押し倒された。

「っ！」

声にならない痛みが駆け抜けた。首筋の傷口が開いてしまったようだ。

両肩を地面に押し付けた上に馬乗りになるような形で見下ろされている。

「僕はあんまり考えるのが得意じゃないんだ。『音』とは違うから。

「

昨日のヒトとは違って、目が半分しか開いていない。一見眠そうにも見えるが、押さえつけている力は本物だった。

身じろぎ一つ出来ない。

吸い込まれるようにして群青色の瞳を見つめた。

「『音』はどこに行ったのかな？」

ああ、この瞳だけは二人とも一緒だ。何も映らない、覗いてみる

とあまりに何もなくて恐怖を感じるほどに深い色の瞳。

「左手のこれも『音』がやったんだよね」

ゆっくりと覆いかぶさるように押さえつけられて、銀色の髪が頬にかかる。顔のすぐ横に息遣いの気配がする。

低くてよく通る声が耳元で囁くように響いた。

「きれいな切り口だ」

「……あつ！」

銀髪のヒトの右手が左肩からするりと左腕をつたった。ぱりりと乾いた音がして籠手をはがされた。

体全体が触れそうなくらいに近い。

よそから見れば、もしかすると抱き合っているようにも見えるかもしれない。

「でも『音』に切られるようなこと、いったい君は何をしたのかな？」

「ぎりっ」

「うあああああ！」

傷口を抉られて、口から悲鳴がほとばしった。

脳髓を揺さぶるような痛みを意識が飛びそうになる。

抵抗する気力は残っていない。

もう何もかも諦めて全身の力を抜いた。

「何だ、もう終わり？」

力の抜けた首筋に、銀髪のヒトの左手がかかったのがわかった。

右手はまだ自分の左腕の傷口にある。

「さよなら、レメゲトン」

昨日のヒトもそんなことを言っていた。

でも、そんなことどうでもいい。

とにかくちゃんと伝えなくちゃ。二人ともお互いを探しあっているんだ。声が出なくなっちゃう前に、早く。

「見た……」

かろうじて喉の奥から声を絞り出した。

首筋にかかる手が呼吸を妨げていた。

「おまえと同じ……でも違う顔……」
伝えなくては。

昨日のヒトが探していた『光』というのがこのヒトなら。

「昨日の夜……だと思う。ここにいた……おまえを探して」
切れ切れの呼吸。

銀髪のヒトは喉元に据えていた手をすつとはずした。

「その前に……落ちてたんだ、路地裏に……朝……」

「どこの路地裏かな？」

「本屋の裏、壁の崩れたところ……」

ちゃんと話せているだろうか。

朦朧とした意識の中で青銀の髪が風になびいているのを見た。

とてもきれい。太陽の光を反射してきらきらと輝いて、まるで水底にいるみたいだ。

「それで、『音』はどこへ行ったのかな？」

「わからない……おれはさっき目が覚めたところ……」

「そうか、ありがとう。さよなら」

水底のような淡いシルバーブルーの煌きの向こうに、銀色のブレイドが鈍く光った。

ああ、今度こそもう本当に死ぬかも。

案外冷静にそう判断した瞬間だった。

「『光』！」

よく通る低い声。

銀のブレイドは喉元でぴたりと止まった。

同時に自分を縛っていた圧力は消えた。

空が目の前に広がる。まぶしさに思わず一瞬目を閉じてから、ゆっくりともう一度開いた。

もう、いいのかな。

さっきのは昨日のヒトの声だ。今日の銀髪のヒトとちゃんと出会

えたみたいだ。

ああよかった。

体がピクリとも動かない。痛みは臨界点を越えた後、嘘のように引いていった。まるでふわふわと体が浮いているようだ。

誰なのか、何でここにいるのかも知らない二人だけど、とてもきれいなヒトたちだった。

何で自分が攻撃されて殺されそうになったのかもよくわからないけど、まあそれはどっちでもいいや。

自分も早くねえちゃんに会いたい……

「『光』、レメゲトンを！」

「分かってる」

あーやっぱりだめか。

ここで死んじやうみたい。

ねえちゃんにもう一回会いたかったなあ……

何もかも諦めて目を閉じた。

SECT・7 はじまりの終わり

ひそひそと小さな声がした。

眼を開けるほどは覚醒していない。ぼんやりと耳に入る単語を追いかけた。

「3年間も？ 国にはまったく報告していないのか？」

「……してないわ。だってもう何十年も前に無くなったと思われていた滅びのコインなのよ？ 今さら見つかって、いったいどうするというの？」

「国王はそれを望んでいる」

「私はあの子をそんな世界に入れたくないのよ」

「だが、戦になるのは時間の問題だ。その時グラシャ・ラボラスの力がどれほど切望されると思う？ どれほど有効に働くと思う？」

「そういう問題じゃないわ！」

ぴりり、と空気が揺れた。

その声を聞いたことで少し覚醒に近づいて、手をピクリと動かし
た。

それだけで体のあちこちに痛みが走った。

「う……」

まだ、生きている。

連続で何度も何度も死にそうになって、何度も諦めたけど。

まだ、生きている。

「ラック！」

ずっと聞きたかった声がした。

うつすらと眼を開き、ブロンドを視界の隅に入れてほっとする。

「ねえ、ちゃん」

「よかった……」

ねえちゃんの顔が悪い。大丈夫なんだろうか。

「だいじょうぶ？ 顔色……あんまりよくないよ？」

そう言つと、ねえちゃんは泣きそんな顔で笑つた。
なんで？

「ばかね」

額にひんやりとした手の感触があつた。

気持ちいい。

「休みなさい」

「ねえちゃん」

「なあに？」

「銀色のヒト……見たよ。すごくきれいなヒト……路地裏に落ちてた」

「そう」

「そんでね、壁が壊れてて……怪我してて……」

ああもう自分でも何を言っているのか分からない。

「も一度……会いたい……」

ねえちゃんの顔が悲しそうに歪んだ。

「分かつたわ、分かつたからラック、今は眠りなさい」

「うん。いっぱい話したいこと……ある……よ……」

意識が深いところへ沈み込んでいく。

ねえちゃんの顔も声も、痛いのも全部遠くなっていく。
波間に漂うようにしてゆっくりと眠りに落ちていった。

SECT・8 たびだちの朝

どうやら銀髪のヒトは自分を殺さなかったらしい。隣町へ行く途中の森の中、もう使われていない教会に倒れているところをねえちゃん拾ってきてくれたのだと知った。

これで、ねえちゃんに拾ってもらったのは二回目だ。

戻ってきてからずっとねえちゃんの店の奥、いつも上客が寝泊りする部屋で天井といくつか絵画のかかった壁だけを見ながら寝暮らした。

左腕は相変わらず痛かったし、疲れきった体は動いてくれなかった。

ねえちゃんは一日何回かご飯を運んでくれて、起き上がれない自分に食べさせてくれた。

そんな風に看病してもらうのが嬉しかった。

ねえちゃんが出来る限り傍にいてくれるのが何より幸せだった。

そして何日か経って、やっとベッドの上に起き上がれるまでに回復した。首の後ろは相変わらず突っ張ったけれど、動けないほどの痛みはもうなかった。

そうやって体を起こして、ベッドに並べた椅子に座っているねえちゃんにずっと銀髪のヒトの話を繰り返していた。

「それでね、銀髪のヒトの声がね、湖が静かな時に聞こえる音に似てたよ。低くてすごく澄んでた」

「そう。もう一度聞いたら分かるかしら？」

「うん、忘れてないよ！」

同じ話を何度もしていたと思うが、ねえちゃんは笑って聞いてくれた。

「あのヒトたちにもう一回会いたいんだ」

これもここ何日かの間ねえちゃんに向かつて繰り返したセリフだ。
「本当に？ あなた、その二人に殺されかけたんでしょ？」

「んーでも会いたい」

それは理屈じゃなかった。

最初に見たときからもうあの銀色のヒトの虜だった。ひどい怪我を負わされても、訳の分からない尋問を受けても、たとえ殺されかけてもそれは揺るがなかった。

あの吸い込まれそうな群青の瞳に魅せられていた。

「また狙われるわよ？」

「それでも」

よく分らない信念のようなものが自分を後押ししていた。

それは、赤いオーラの銀髪の人を見て今までにない強烈なフラッシュバックを体験したせいだったのかもしれない。あれを辿っていくと、過去の自分に起きた出来事を思い出しそうな気がした。そして、自分のやるべきことをちゃんと見つけられそうな気がした。

「もしかすると、あの銀色のヒトはおれの過去とつながっているかもしれないんだ」

すると、ねえちゃんの表情が変わった。何かを決意した顔。少しこわばった表情の裏に見え隠れする感情は哀れみと……微かな絶望だった。

ねえちゃんの口がゆっくりと動く。

「あなたは、自分の過去を知りたいの？」

気まぐれ猫の金目が何もかもを統べる王様の黄金の煌きに変わった。黄金の中に強い意志の光が灯っている。

でも、迷うことなく真直ぐに見つめ返す。

迷う理由なんてどこにもないのだから。

「知りたい！」

「本当の名前も？ どこから来て、どんな人生を歩んでいたのかも？」

「うん、もちろん。それから、家族のことも生まれたところも、ど

んなものが好きで毎日何をしてたのかも」

「それじゃあ」

ねえちゃんはそこでいったん言葉を切った。

躊躇しているみたいに見えた。

「……そのコインの意味も？」

「それが一番知りたい」

ねえちゃんの瞳の中に灯っている意思の光が一瞬揺らいだ。

「銀髪のヒトがこれを破壊するって言った。ロストコインって呼んだ。いったいこれは何？」

またねえちゃんは泣きそうな顔になって、王様の瞳はもとの猫に戻った。

「それを知ったら、もう戻れないのよ？」

「いい。おれは、ねえちゃんがここに来てくれればそれでいい」

本心からそう思った。

ねえちゃんさえいればいい。そうしたら、他に何がなくとも生きていける気がする。

「ばかね」

ねえちゃんは顔をくしゃりと崩して自分を抱きしめた。

「大丈夫、あなたは私が守ってあげるわ」

「ねえちゃん？」

押し当てられたねえちゃんの肩が少しだけ震えていて、きつと自分分は初めてねえちゃんが泣くところを見た。

でもその日ねえちゃんはもう自分のところに来なかった。

次の日の朝、ねえちゃんに起こされて寝ぼけ眼をこすりながら体を起こした。

だいぶ調子がいい。今日は何とかベッドから出られそうだ。

「ラック、朝ごはんを食べたら出発するわよ」

「どこに？」

ねえちゃんの瞳がまた王様の光を灯した。

ゆつくりと、でもはつきりとねえちゃんは行き先を告げた。

「王都よ」

昼になる前に、ねえちゃんが服を持ってきてくれた。

薄いオレンジの短衣に黒のスパッツ、グレーの半袖パーカー。それと、

「ごめんね、左腕の分も洗ってはみたんだけどもう使える状態じゃなかったわ」

いつもの籠手を、右手の分だけ。

それと水色のバンダナはやっぱりもうなかった。どこかで落としてしまったらしい。

「ありがとう」

もうかなり回復した体でベッドの縁に腰掛けてみるけれど、左腕だけはまだ動かない。もしかすると、一生動かないのかもしれない。

ねえちゃんに着替えを手伝ってもらって、何とか服をまとうことができた。

「あまり無理しないのよ？」

「だいじょうぶ！」

何日かぶりに地面に足を下ろしてゆつくり体重をかける。

さすがに一瞬揺らいたが、すぐに体勢を立て直すことが出来た。

自分の足でしっかり支えた。

「じゃあ、行くわよ。店の前に馬車を待たせているの」

「わかった」

一歩ずつ足を踏み出した。

「王都まで馬車で5日ほどよ。長い旅になるわ」

ねえちゃんは自分の左腕に少し目をやった。

痛々しいくらいに包帯が巻かれていて、だらりと力なく体の横に下がっている。何針も縫ったのだとあとでねえちゃんが教えてくれ

た。

「辛くなったらすぐ言うのよ」

「分かった」

もう傷は痛まなかったし、倦怠感もかなり消えていた。

外に出ると数日前よりさらに夏に近づいた太陽が迎えてくれた。

「まぶしい！」

「久しぶりの太陽だものね」

今日は体のラインを押し出さない白いふんわりとしたワンピースを着たねえちゃんかくすくすと笑って自分の右手を引いた。

SECT・9 たびだちの出会い

店の前にはやたらと豪華な馬車が止まっていた。こんなにもきれいで大きな馬車をこの街で見たことがない。御者もまったく面識のないヒトだった。

「さあ、行きましょう」

ねえちゃんに支えられて階段を上る。

中に入ると、先客がいた。

こちらも見ただことのないヒトだ。

自分と同じ漆黒の髪は腰近くまであるストレートだったが、顔を見ると端正な男性の顔つきだった。不機嫌だからかもともとそうなのか分からないが、睨むような鋭い視線がこちらに向けられていた。その濃い紫の瞳には何の感情も映っていないように見えた。

闇の色をしたマントを羽織っていて、それが似合うのが少しだけ怖いなと思った。

「あ……えーと、誰？」

「忘れてたわ」

後ろから馬車に乗り込んだねえちゃんが答えた。

「私の知人のアレイスター＝W＝クロウリー。今回王都まで一緒に行くのよ」

「はじめまして、クロウリーさん。おれはラックといいます。よろしく」

「……よろしく」

少し会釈しただけでそれ以上こちらを向いてはくれなかった。でも、見た目どおりのバリトンの声は耳に心地よかった。

だから、その黒いヒトの隣に腰掛けた。

ねえちゃんは向かいに座る。

小さな窓をこんこん、と叩いて御者に合図を送った。

壁を隔てて馬の嘶きが聞こえて、走り出すとき独特の圧迫感が一

瞬自分の体を押さえつける。

「さて、何から話そうかしら……説明は手伝ってくれるのよね、アレイ？」

「ん、まあ、それなりに」

仏頂面はどうやら元々らしい。

見た目以外は、例えばこの黒いヒトが纏うオーラや雰囲気はぜんぜん怖くなかった。

「それじゃラック、今まであなたに教えていなかったこの国のこと、グリモワール王国のことから少しずつ話していくわ」

「グリモワール王国？」

「そうよ。あなたや私が今住んでいるこの土地を治めているのは、ゲーティア⇨ゼデキヤ⇨グリモワール様。グリモワール王国第22代ゼデキヤ王という方なの」

「ゼデキヤ王」

「そう。私たちが住んでいたカトランジェの街や、隣のジャスパグ、今向かっている王都ユダ・イスコキュートスもそうよ。みんなゼデキヤ王が支配してらっしゃるの」

「王都ユダ・イスコキュートス」

難しい単語は繰り返し返す。何度も口に出して覚えるために。

「ユダというのはグリモワール初代国王の名前よ。ユダ⇨ダビデ⇨グリモワール。でも、ダビデ王と呼ばれることのほうが多いわね」

「ユダ⇨ダビデ⇨グリモワール」
グリモワール王国。ゼデキヤ国王、初代国王ユダ⇨ダビデ⇨グリモワール。首都ユダ・イスコキュートス。
難しい単語ばかりだ。

カフェのマスターの名前ですらうまく覚えられなくてずっとマスターと呼んでいたのに。

うーん、ちよつと覚えるのは難しそうだ。

眉を寄せたのを見てねえちゃんが朗らかに笑った。

「覚えなくても大丈夫よ、ラック」

「ほんと？」

「できれば、今の王様の名前だけ覚えておきなさい」

「えーと、ゼデキヤ王。ナントカゼデキヤ・グリモワール」

「それで十分だわ。それ以外はなんとなく覚えていればいいわよ。これからどんどん難しい話をするから」

「分かった」

よかった。覚えなくてもいいんだ。

そう思っただけで顔を崩すと、黒いヒトはあきれたようにため息をついた。

「何だ、こいつただの阿呆か」

「むっ！なんだよう」

さすがにカチンと来て唇を尖らせた。

黒いヒトはこちらを向きもせず視線を床に落としたまま静かなバリトンの声で続ける。

「事実を言ったままでだ」

「アレイ、やめなさい。ラックも落ち着いて」

「だって、ねえちゃん！」

「年は知らんが、どう見ても20近いだろう。精神年齢はいつたいいくつだ？ 頭の年齢も調べたほうがいいぞ。信じられんくらいに役に立たん頭だろうな」

「おれが阿呆なんて、そんなこと自分だって分かってるさ！」

「そうか、分かってるか。分かっててそれじゃあお前はもう救いようのない馬鹿だな」

「何だと！」

分かっていることとはいえ、なぜかこの黒いヒトに言われると腹が立つ。言い方の問題なんだろうか、カフェのマスターに同じことを言われてもまったく平気だったのに。

眉間にしわを寄せて、唇を尖らせてその黒いヒトを睨んだ。

でも、黒いヒトは紫色の瞳で一瞥しただけで視線を窓の外に向けた。

窓の外では見慣れた街の景色が見たことのない速さで遠ざかって
いた。

「もうやめなさい、アレイ。……ラック、続きを話すわよ？」

「うん、いいよ」

黒いヒトの声は好きだけど、この闇色のマントと口の悪さはあんまり好きになれそうにないや。

「今わたしたちが向かっているのは王都ユダ・イスコキユートス。王都ユダと呼ばれることのほうが多いわ。さっきも言ったけれど馬車で5日はかかるの」

「遠いね」

「そうよ、遠いの。一度行ってしまったらきつと、もうあの街に戻れないわ」

「えっ?!」

唐突なねえちゃんの言葉に思わず眼を丸くした。

「どういうこと?!」

「一度王都に行ってしまったえば、私は情報屋をやめて、元の職に戻ることになるわ。そうしたらもうあの街には戻らない」

「情報屋やめるの? そしたらおれはどうしたらいいんだ?」

「あなたも王都で新しい地位と身分をもらうことになるでしょう。」

いいえ、新しい、というよりはあなたが記憶をなくす前にいた場所に
戻るの」

「うそだ!」

思わず馬車の中で立ち上がった。いた。

がたがたと馬車が揺れる音だけが響いた。

「もう街に戻らないの? マスターにも会えないの? ちびマスタ

ーも? もう街を探索しなくてもいいの……?」

「そうよ」

「そんなの……」

嫌だ、と言おうとして思いとどまった。

自分の過去を知りたいといったのは他でもない自分自身。そのた

めに何かを失うとしても

「ラック、何かを手に入れるとき人は代わりに何かを失うのよ」

ねえちゃん、瞳が王様の光を灯した。

「もし戻りたいというのなら、まだ戻れるわ……あなた一人あの街で生き抜いていくと決心して、実際生きていくことが出来るのなら」

「ねえちゃんは？」

「もしあなたが戻ると言っても、私は王都に行くわ。それはもう覆せないことよ」

「っ！」

どうしようもない感情が胸の中を渦巻いた。

どっちも、嫌だ。本当はずっとあの街で、いつもみたいに探索者として仕事をこなして、ねえちゃんに朝ごはんを作ってもらって、マスターの奥さんが作るケーキを食べて……

昨日は戻れなくていいって言ったのに、実際もう街に戻れないって聞いたらその決心は簡単に揺らいでしまった。

分かっている。このままじゃいけないって分かっていた。

前に進まなくちゃ、今まで知らずにいたことを知ろうとしなくちゃ。

分かっていたはずなのに。

もう戻らないって決心したはずなのに……！

「甘いな、お前。頭の中身も考え方もガキだ」

「うるさいっ！」

闇色のマントのヒトを一喝して、どっかといすに座り込んだ。

今は視線を上げられなかった。

ふるふると震えるひざの上の右手を見つめて黙り込んでいた。

「これも嫌、あれも嫌なんて言っていてどうするつもりだ？お前が望むように進む世界なんて、そんなものどこにも存在しないんだよ」

「……」

「欲しいもの全部手に入れられると思うなよ。無理に決まっている。だから、求めるものをひとつに絞れ。お前が一番大切だと思うもの

を選ぶ。いったい今何を求めるのか、それをさっさと決めてしまえ。決めたならもう迷うな。一番大切なものだけを命がけで追い求めろ」

一番大切なもの。

いま、きつとそれを選ぶ時なんだ。

これまではずっと同じ毎日を繰り返していた。でも、銀髪のヒトに出会って、過去を知りたいと思ってしまった。

「お前が、望むことは何だ？」

とても難しい問いだった。

本当はねえちゃんはずつとあの街で暮らしたい。でも、それは出来ないんだと言う。

あの街で一人で暮らしたい？いや、きつとそれは違う。ねえちゃんがいるからあの街にいたかっただけなんだ。

過去を知りたい？いや、知りたいんじゃない。知らなくちゃいけないという強迫観念が心の片隅にあるだけだ。

それじゃあ、自分が本当に望んでいることはいったい何なんだ？銀髪のヒトに会いたい。それは否定しない。あの強烈な群青の瞳に一瞬で魅了されてしまった。もう一度会えるのなら会いたい。しかしそれは一番大切なことじゃない。もし近くにいると言われたら迷わず飛んでいくけれど、自分の全部をかけて会いに行きたいわけじゃない。

あの街に戻りたいのはなぜ？過去を知りたいと思っただけは？

銀色のヒトに殺されそうになった時、いったい自分は何を思った

……？

「おれは……」

心を決めた。

一番大切なものは。

「ねえちゃんと一緒にいたい」

真直ぐに、王様の光を灯した金色の瞳を見つめた。

「3年前に拾われてから、名前をくれたのも、育ててくれたのも全

部ねえちゃんだ。おれの世界はねえちゃんが創ってくれたんだ」

自分が持つものは他にない。

存在するのはねえちゃんとの繋がりだけだ。

「街にいたかったのはねえちゃんとの生活がしたかったからだ。過去が知りたいと思ったのは、知らずにいつか過去が分つた時にねえちゃんと裂かれるのが嫌だと思ったからだ。おれの世界は全部ねえちゃんと一緒にあるんだ。だから、おれはねえちゃんと行く。もしその行き先が過去なら過去を求め。王都に行くならついていく。街にもう戻らないっていうんなら、おれももう戻らない！」

「ラック……」

「やっぱりガキだな」

「ねえちゃん、おれ付いて行くよ。ねえちゃんが行くんなら世界の果てにだって行く。おれの世界はそこにしかない」

こうして答えが出た瞬間、今度こそもう迷わないと決めた。

窓の外では見慣れた街でなく、既に知らない風景が飛び退っていた。

何も知らない自分は幸せだった。

でも、そのままじゃ自分は納得しなかったろう。だから、一步先に進んだ。最後に背中を押したのは銀髪のととの出会いだった。

知らなくちゃいけない。自分の中で何かがそう叫ぶから。

一番大切なこと それはねえちゃんの隣に居ること。それさえ分かってしまえば、他のものを捨てるのは簡単だった。

それまでの生活にサヨナラを告げた。

大きな大きな運命の渦に巻き込まれて、それはいつしかねえちゃんと自分を裂いていく……そんなこと知る由もなかった。

だから、この時が一番幸福だったのかもしれない。

隣にねえちゃんがいて、それが永久に続くと思っていたこの時が
.....

ディアブル大陸の西岸を支配するグリモワール王国。

穏やかな気候と豊かな大地を有するこの王国は500年近く前に初代国王ユダ・ダビデ・グリモワールが建国して以来おのおの時代の賢王に守られて安定を保ってきた。

それを支えたのは、国に仕える天文学者と呼ばれる者たちだった。彼らはその名の通り天に浮かぶ星や月、惑星の動きから未来を読みそれを国政に反映させた。その優れた占星術で大災害も隣国の反乱も事前に察知し、グリモワール王家に繁栄の時代をもたらした。

しかし彼らが駆使したのは占星術のみではなかった。

初代グリモワール国王ユダ・ダビデ・グリモワールは稀代の天文学者ゲーティア・グリフィスと共に、72の悪魔を魔界から召還した。

悪魔それぞれと契約した証に全部で72のコインを作り、72人の天文学者にそれぞれ与えた。

コインは悪魔の持つ力を具現化する。王家に仕える天文学者たちはその悪魔を呼び寄せて、その能力を使役してきたのだ。

天候を操る能力、過去や未来を知る能力、戦いの力、人の心を操る能力 72の悪魔の力は恐ろしく強大で抗いがたいものであった。

その絶対的な力への畏怖もあって国内も隣国でもほとんどグリモワール王国への反抗を企てるものはいなかった。いや、企ては秘密裏に処理されたというのが正解かもしれないが。

しかし、何百年もの時は流れ、王家が所有するコインの数はいつしか減っていた。

72人いた天文学者も今ではわずかに5名、所有するコインは17にまで減ってしまった。

太古の天文学者と同じ名前を授けられた現国王ゲーティア・ゼデキヤ・グリモワールは5名の天文学者に、失われた55個のコイン
ロストコインを集めるよう勅命を下した。

それが今からちょうど3年前の話

SECT・10 ロストコインとレメゲトン

窓の外を映り行く景色を観察するのにも飽きてしまった。

すでに馬車で4日目。明日には王都に着くというが、周りの景色はこの3日間ほとんど変化がない。退屈の虫が全身を支配していた。

「ねえちゃん、また何か話してー」

「またなの？少しくらいじっとしてなさい」

「もう飽きたよ」

「まったく仕方のない子ね」

ねえちゃんは困ったように笑いながら、これまでもたくさんのお話をしてくれた。

初代の王様が召還した悪魔の話。その悪魔を使役した天文学者たちの話。

ねえちゃんとアレイさんは3年もの間ずっと失われたコインロストコインを探していた。

自分が持つコインは、その失われたコインのうちのひとつなのだという。

じゃあ何でおれを見つけたのに王様に黙って3年間一緒にいられたの？と聞くと、ねえちゃんは、きつとあなたが思っていることと一緒に言ってくれた。

つまり、ねえちゃんはおれと一緒に暮らすのが楽しかったらしい。それが何より嬉しかった。

「じゃあ今日は、最強の剣士マルコシアスについて話しましょう」
「わあい」

「マルコシアスは第35番目の悪魔。普段は大きな翼を携えた勇ましい狼の姿をしているの。人の姿になったときは剣で戦うことに関しては誰にも負けない、正々堂々としたすばらしい戦士よ」

「へえー」

「嘘をつくのが大嫌いで、嘘をついた人を大きな剣でまっぴらつに

切ってしまうの！ そんなマルコシアスのコインを最初に使役したのは、炎妖玉騎士団ガーネットを創立したレティシア・クロウリーという女性の天文学者。彼女は天文学者であると同時に勇壮な女騎士だったの。ダビデ王が彼女にマルコシアスを託したのも、彼女の剣の腕を見込んでのことよ。」

「すごい、かつこいいね！」

「レティシア・クロウリーはマルコシアスを使役して数々の戦いに赴いたわ。隣国クトウルフとの領土権争い、蒼水星騎士団アクアマリンの反乱：…中でも有名なのは、第32番目の悪魔アスモデウスが天文学者の手を離れて暴走した時の話ね。そう、それは2代目ソロモン王の時代だったわ。」

32番目の悪魔アスモデウスは、当時使役していた天文学者ハワード・フリップスの手を離れて暴走した。もともと悪魔は人間に従順に従っているわけではない。隙を見れば簡単に人間を裏切って、自身の欲望に忠実になる。

常日頃人間に使役されるのをよく思っていなかったアスモデウスはハワード・フリップスの体に乗っ取って王都に進出、ジュデツカ城に単身攻め入って城を守る衛兵や王都に在住していた輝光石騎士団ダイヤモンド、漆黒星騎士団ブラックルビに甚大な被害をもたらした。

それだけでは済まず、城内の天文学者を残らず蹴散らしてからソロモン王の玉座を乗っ取ってしまったのだ。王国には全部で12の騎士団があつたが、輝光石騎士団ダイヤモンド、漆黒星騎士団ブラックルビはその中でも3本の指に入るほどの屈強の騎士団だったために他の騎士団は王都奪回をしり込みしていた。

悪魔が国を乗っ取った。それを隣国はグリモワール王国に攻め入る好機と見た。

グリモワール王国始まって最初の危機だった。

だが、アスモデウスの天下は長く続かなかつた。

偏狭の地まで治安の制定に出かけていたレティシア・クロウリー

は玉座乗っ取りの知らせを受け1ヶ月後王都に帰還した。そして、35番目の悪魔マルコシアスと王国最強の炎妖玉騎士団ガイネットを率いて、わずか3日でアスモデウスを打ち倒しジュデツカ城を取り返したのだった。

暴走したアスモデウスは鉄の枷をかけられ、2代目国王ワイズⅡソロモンⅡグリモワール本人によって使役されることとなった。

「この出来事を『暗黒の33日間』と呼ぶの」

「へえー。すごいんだ！でも、マルコシアスのコインはまだ見つかっていないの？」

「いいえ、マルコシアスはずっとグリモワール王家に仕えてきたわ」「やっぱり、裏切ったり逃げたりしないんだね」

「そうよ」

ねえちゃんはふつと視線をアレイさんに向けた。

「見せてあげて、アレイ」

「えっ、アレイさんが持つてるの？」

「コインは基本的に親から子へ継承されるの。アレイのフルネームはアレイスターⅡWⅡクロウリー。彼はレティシアⅡクロウリーの子孫よ」

アレイさんは少し嫌そうな顔をしたが、闇色のマントの中から左手を突き出した。

その左手首には銀色のチェーンが巻かれていて、トップにコインが2個提げてあった。

「うわあ……」

自分のと同じ、くすんだ金色のコインにはどちらにもやはり似たような幾何学模様が描かれていた。でも、どうやらコインに記された模様は一つずつ異なっているようだ。

「もうひとつのコインはどんな悪魔なんだ？」

アレイさんにそう聞くと、無表情で淡々と解説してくれた。

「第43番目の悪魔、サブノック。ライオンの頭部を象った兜をか

ぶり、くすんだ青のマントを身に着けている。時に青い毛並みの馬に乗っていることもある。こいつも強い……めったに加勢はしてはくれないが。サブノックの剣で切られると傷口が腐って蛆が湧くといわれている」

「うわぁ！」

怖い。

「だが、それよりももっと重要な能力はこいつの武器製造能力だ」「武器製造？」

「そうだ。個人に合った武器を一晩で作成してくれる」

アレイさんは左手をまたマントの中にいれてしまった。

「マルコシアスに比べてサブノックは扱いづらい。めったなことではサブノックは呼び出さん」

「へえー」

悪魔にもいろいろなヒトがいるんだな。いや、ヒトと呼ぶのが正しいかは分からないのだけれど。

「マルコシアスとサブノックを役するアレイは戦闘に特化した天文学者よ。グリモワール王家に仕えているうちで唯一、戦場に出て行く天文学者なのよ」

「そうなんだ。アレイさんは強いんだね」

アレイさんはこっちを見てくれなくて、相変わらず馬車の外の走る景色を眺めていた。

でもここ何日かで分かったのはこのヒトが最初思ったほどに怖いヒトでも意地悪なヒトでもないってことだ。

きっとたまに口が悪くなったりするのは照れ隠しで、本当はすごく優しいヒトなんだろうと思いたい。だから、本当は仲良くしたい

……

「お前に褒められても褒められた気がしないな」

「何でだよ。正直に言ったのに」

そう思いたいんだけど、どうしてこう口を開くとうまくいかないんだろう。

「第一、俺が戦闘に特化しているように、5人の天文学者はそれぞれ能力に特色がある。俺だけが特殊なわけじゃない」

「そうなのか？」

「そうだ」

でも、こうやっていくらか知識を足してくれる時のアレイさんの紫色の瞳に灯る理性的な光はとても好きだった。

「例えば5人の中で唯一王都に残留したくそじじいは占星術の悪魔オリアクスと老賢者フルカスに加えて、それぞれ未来と過去を見るヴィネーとオロハスを使役している。主に情報戦担当の天文学者だ」
「持つてるコインの数はヒトによって違うんだね」

「そうだ。くそじじいが4個、俺は2個、あと3個持つてるやつが2人、それからここにいるねえさんが5人の中で最高の5個。あとは、この3年間で集まったコインが5つある。それは国王が所持していて、所有者になる天文学者を探している」

「アレイ、そんな風と呼んじやだめじゃない」

「くそじじいはくそじじいだろ」

アレイさんはふん、と鼻を鳴らして不機嫌そうに黙り込んだ。

ねえちゃんは困ったように苦笑して自分の頭をなでくれる。

「あなたのコインを合わせて今王国が所有するコインは23個。残り49個のうちいくつかは国外へ流出してしまったものもあるわ」
「ねえちゃんたちはそのコインを探してるんだね。それがねえちゃんの本当の仕事なんだ」

「そうよ。きつと全部のコインを集めるには何十年もかかるわ」

「大変だあ」

「ラック、これからはきつとあなたにもその仕事を手伝ってもらうことになると思うの」

「うん、もちろん！」

にこりと笑ってそう答えた時だった。

ガクン！

急に馬車が停車した。

「何？」

ねえちゃんがこんこん、と御者の窓を叩く。
返事はない。

「ここで待つてる」

アレイさんはそう言うと馬車を出た。

「ラック、ここを動いちゃだめよ」

ねえちゃんもそれに続く。

ぼつんと一人馬車の中に置き去りにされた。

外からは、微かに言い争う声がする。内容は聞き取れないが、声には覚えがあった。

ねえちゃんの澄んだメゾソプラノと、アレイさんのバリトン、それから、

そう、低くてよく通る声。

「あっ！」

これ、銀色のヒトだ！

言いつけを破って外に飛び出した。

そこで目にしたのは、銀色のヒトが二人とそれに対峙するねえちゃんの姿、それから……

「中にいると言っただろう」

バリトンの声が冷たく響いた。

左手に細い剣を構えたアレイさんの背後には、何か影のようなものが見えた。

目を凝らすとそれはどうやらヒトの形をしているのが分かった。
腰から下はぼんやりとしていて見えないが、背には白い翼が見えるし、頭の上には金冠が浮いている。

「……天使？」

「黄金獅子の末裔か 本当に生き残りがいたとは」

白い翼のそのヒトは自分の声に反応して不意にこちらを振り向いた。

風に靡いた黒髪からは短い角が二本生えている。猫のように釣りあがった目には炎妖玉ガイネットと碧光玉サファイアが一つずつはめ込まれていて、袖なしのくすんだ紺の服からは鍛え上げられた腕がのびている。赤い刃の剣と青い刃の剣をひとつずつ手にしていた。ただ無闇に筋力がついただけでなく、しなやかで躍動的な肢体。年は自分と同じくらいだろうか、まだ少年のようなあどけなさを残した表情と褐色の肌、八重歯の目立つ顔が視線をひきつける。

その野生的な雰囲気は、凜として物静かな雰囲気のアレイさんとあまり似つかわしくなかった。が、瞬間的に理解できた。

「アレイさんが持つてるコインの35番目の悪魔さん？ えーと、マルコシアスさん」

「ほほう 我の名を知るのか 過去を持たぬ少女よ」

少年のような風貌には似つかわしくない口調でその悪魔は微かに唇の端をあげた。

けれどもそれは、先ほど聞いた勇壮で正々堂々としているというねえちゃんの説明に違わぬ立派な剣士そのものだった。

「さつきアレイさんが教えてくれたんだよ」
にこりと微笑みかけた。

悪魔という名前から想像していたよりずっと親しみやすそうだ。

ただ、この悪魔さんから発せられる闘気はこれまで感じたこともないくらいに強いものだったけれど。強い闘気でびりびりと肌が震えるような感覚を受けた。

「初めまして。よろしく、マルコシアスさん」

「ふふ 礼儀正しいな」

悪魔のマルコシアスさんは楽しそうに笑った。

でも実は、それよりも、初めて見る悪魔さんよりずっと気になっているヒトがいる。

「銀髪のヒト……」

明るい太陽の下で見る青みがかった銀髪のはとは、周囲の背景から浮いてしまうほどに白い肌をしていた。

この間のような聖職者の服ではなく肌にぴったりとした黒い服。袖はなく、白地に金の紋様が描かれている手甲から銀のブレイドが飛び出していた。

「この間のレメゲトン！ 貴様らやつぱりグルだったのか！」

真っ赤なオーラをほとばしらせて、その銀髪のはとは自分を睨みつけた。深い群青に吸い込まれそうになった。

治ったと思っていた左腕の傷が疼いて、思わず顔をしかめた。

その空気を感じ取って、アレイさんが自分と銀髪のはとはの間立ちただかる。

「貴様……またしても邪魔をするのか、今度こそ叩き潰してやる！」

「なお 我に戦いを挑むか」

アレイさんは左手で長剣を構える。

マルコシアスさんの翼で視界がさえぎられた刹那。

「がぎいん！」

金属音がした。

心臓が抉られるような感覚を受けて、思わず身震いした。

「ラック、中に戻りなさい！」

ねえちゃんが叫んだ。

もう一人の銀色のはと、青いオーラの涼やかなはとがねえちゃんに向かってブレイドを振りかざすのを見た。

「ねえちゃん！」

でもねえちゃんは全く慌てることなく叫んだ。

「クローセル！」

その瞬間、ねえちゃんの足元に黒々とした魔方陣が出現した。三角を二つ逆方向に合わせた星のような形をモチーフにして、見たことのない文字が所狭しと描かれている。

次の瞬間、ねえちゃんの周囲に水の嵐が巻き起こった。

「！」

水は壁のようにして青いオーラの銀髪の一トを阻み、竜巻のように回転して天へ消えた。

代わりに、ねえちゃんの頭上には美しい天使が現れた。

「うっひゃーっ ひっさしぶりだねえ ミーナねえさん」

「……久しぶり、クローセル」

「なに？ 俺を呼び出すなんて そんな切羽詰ってるわけ？」

「そうなの。力を貸してくれるかしら？」

「もう ねえさんの頼みなら 何だって」

「ありがとう」

気のせいかねえちゃんの顔は引きつっている。あんまり呼びたくなかったのに、という感情が駄々漏れだ。

天使はふっと自分のほうを振り向いてじろじろと無遠慮に観察してきた。

「んで？ あれが 原因？ ふーん」

「大切な子なの。絶対に守るのよ」

「へー おっそろしいもん持ってんな」

天使はさらさらの金髪に青空のように澄んだ青い瞳を持っていた。切れ長の瞳は知性的なのに、口調からは全くそれが感じ取れない。一枚の大きな布を体に巻きつけただけで、均整の取れた肢体がいくらあらかわになっっている。しなやかで豹のような男性の体つきは見る者の目を惹きつける。

口元に微笑をたたえて、手にした三叉戟をぶんと振りかざした。ついでに言うと、あの攻撃力の高そうな三叉戟も見た目と合っていない。

「まったく 俺のミーナねえさんだったのに お前なんか現れるから 呼び出しが減ったじゃねーか！」

「余計なこと喋らなかつたらもつと呼び出してあげるわよ！」

もしかして、あの天使にしか見えない金髪碧眼のこのヒトも悪魔の一人なんだろうか。

三叉戟を突きつけられて動けないでいると、ねえちゃんはあきれ

たよりに青いオーラの銀髪のヒトを指差した。

「敵はあつちよ、クローセル。あの子を王都に送る途中なの。……邪魔する者を、排除して」

「へいへいほー」

クローセルと呼ばれた天使さんは、三叉戟をぶん、と振って地上に降り立った。

マルコシアスさんと違ってちゃんと足もある。

「あつち行つててくれる？ そののがきんちよ」

「……おれ？」

自分を指して首を傾げると、三叉戟を振りかざした天使さんにはやりと笑った。

「おうよ まああと5年だな かなり楽しみではあるが」

「クローセル！ ラックに手を出したら承知しないわよ！ もう二度と呼ばないから！」

「ひどいわあ ミーナねえさん 今の俺はあなた一筋よ？」

「それも嫌！」

ねえちゃん握りこぶしを固めて叫んだ。

「ひでえええ」

そんな風に叫びながら、天使さんは飛び掛ってきた銀髪のヒトを横目に確認すると、軽く腕を振って水の球を走らせて吹っ飛ばした。

「ぐはっ……」

後ろ向きに吹っ飛ばされる青いオーラの銀髪のヒト。地面に叩きつけられてそのまま動かなくなった。

天使さんはそちらに眼を向けることもなく、ねえちゃんに抱きつかんばかりの勢いで擦り寄っていった。

「ねえさんのためならなんだってするよ 俺 命だって賭けちゃう」

「ばっかっ！」

ねえちゃんがきりりと眉を吊り上げた。

ねえちゃんを怒らせるとは、なんて無謀な天使さんなんだ。恐ろしくてそんなこと自分には絶対できやしない。

しかも、あの銀髪のヒトを一瞬で吹っ飛ばした。自分は手も足も
出なかった相手だというのが！

SECT・12 クローセル

呆然と天使さんとねえちゃんのやり取りを見ていると、

「ぎいいん！」

突然、すさまじい金属音がした。

はっとしてそちらを見ると、アレイさんの攻撃を避けて銀髪のとトがこちらに刃を向けていた。

ねえちゃんの方が少しばかり和んでいたものだから、一方でアレイさんが銀髪のヒトと打ち合っていたのをすっかり忘れていた。

戦場ではそれが命取りになるって、ねえちゃんは口をすっぱくして教えてくれていたっていうのに。

「しまった！」

「ラック！」

アレイさんとねえちゃんが同時に叫んだ。

真っ赤なオーラの銀髪のヒトは銀色のブレイドをまっすぐ自分に向けた。

群青色の瞳に吸い込まれて、まったく動くことが出来なかった。

「死ね！」

「！」

「やれやれ 致し方あるまい」

どうしようもなく立ち尽くし、目を見開いたその視界に純白の翼が飛び込んできた。

褐色の肌と黒髪が翼を翻した狭間微かに捉えられた。

「ぱつきい……ん」

次の瞬間、澄んだ音が響いた。

目の前をかすめてブレイドの欠片が地面に突き刺さった。

「……！」

驚いて声も出なかった。

「これで終いだ」

自分の前に立ちはだかつたマルコシアスさんの剣で吹っ飛ばされた銀髪のはとは、地面の上で動かなくなった。

「あ、ありが、とう」

「礼には及ばん」

サンダルを履いた褐色の足まであらわになったマルコシアスさんは、剣をきちんと鞘に収めた。

全身を見て改めてその覇気に圧倒された。

ぼろぼろになってくすんだ紺の布、炎妖玉ガイネットと碧光玉サファイアが嵌め込まれた褐色の肌、鍛え抜かれたしなやかな肉体、まだあどけなさを残す八重歯と表情。背には白い翼をたたえ、頭上に金冠をいただいている。

あまりに壮麗な姿に、思わずどきりとした。

「大丈夫か 過去を持たぬ少女」

「平気です。助かりました」

どきどきしながらにこりと笑い返した。

それを見て満足そうに笑うと、壮麗な戦士はアレイのほうを向き直った。

「アレイ お前はまだ修行が足りぬな」

「……精進します」

普段口の悪いアレイさんがマルコシアスさんの言葉には素直に頷いたのが少し楽しかった。

口の悪い天使さんは銀髪のはとたちをずるずる引っ張ってきた。

「んで？ こいつらどうするんだ ねえさん」

「王都に連行するわ」

ねえちゃんも足元に転がった銀髪のはとたちを見てそう言った。

はっとして銀髪のはとに駆け寄ろうとすると、マルコシアスさんのたくましい腕が自分をとどめた。

「なぜだ」

「え？」

思わず赤と青の二色の瞳を見つめ返すと、その戦士は厳しい目で

自分を見下ろしていた。

「あれは 敵だ なぜ 殺されかけてなお 近寄ろうとする？」

「……ずっと会いたいと思ってた。このヒトはおれの過去に関係あるんだ。もしかするとおれが知らないおれを知っているのかもしれない」

きっとそれだけじゃない理屈で説明できない感情が関わっていたのだけれど、それを言葉にするのは難しすぎた。

マルコシアスさんはなぜかとても悲しそうなお表情で自分を見下ろして、きつぱりと言った。

「やめておけ アレイと金色猫に任せよ」

「でも」

話したい。声を聞きたい。あの銀色の髪に触れたい。

なおも食い下がろうとすると、ねえちゃんが天使さんを促した。

「クローセル、ラックを馬車の中へ」

「あいよ」

「わっ」

金髪碧眼の天使さんの腕に抱えられて、馬車に強制退場させられてしまった。

ばたばた暴れてみたけれど、見た目細い天使さんは割合力があるらしい。

「おとなしくしてる がきんちよ」

「がきんちよって言うな！」

天使さんは自分を座席に放り出して座らせると、自分も反対側に腰掛けた。

翼はどう見ても邪魔そうだけど、大丈夫なんだろうか？

「どっからどう見ても 立派ながきんちよじゃねーか」

この言い方、なんだかどこかアレイさんに似ている。

つまりは、とても腹が立つ。

「むーっ！だいたい誰なんだよ！ねえちゃんに馴れ馴れしいし……」

「当たり前さあ 俺は お前がミーナねえさんに拾われる前から」

「一緒なんだぜえ？」

「にやにやと意地悪そうに笑いながら、天使さんは青空みたいな瞳を細めた。」

「お前なんぞに　ねえさんは　渡せねえさ」

「……もしかして天使さんは、コインの悪魔さんなの？」

「聞くんなら　天使か悪魔かどっちかにしてほしいねえ」

「あなたはねえちゃんのコインの悪魔さんですか？」

「むっとした口調で聞くと、天使さんは勝ち誇ったように鼻を鳴らした。」

「そうさ　俺はクローセル　ねえさんとは生まれたときからの仲よ」

「悪魔さんはみんな天使さんみたいに羽があるの？」

「いや　マルコや俺は特別だねえ　墮天だから」

「だてん？」

「気にすんな　難しい言葉は流していいぜ」

「でも、綺麗だね。さわってもいい？」

「やだ」

「なんでっ！」

「俺の翼を触っていいのは　ねえさんだけだっ」

「いいもん、それならマルコシアスさんに触らせてもらっもん」

「あいつのほうが無理さ　お前　ほんとに俺等が悪魔だって　分か
つてるか？」

「さっき自分で悪魔だって言っただじゃないか」

「そういうことじゃねーんだよ　もっとこう　怖がるとか　敬うと
か」

「何で？」

「この天使さん……クローセルさんの言っていることはちぐはぐ
だ。」

「自分は悪魔だと言っておきながら信じているのかと聞くし、これ
だけ自分から話しかけてからかっておいて、怖がるも敬うも何もな
いものだ。」

意味が分からない。

きゅつと眉間にしわを寄せると、クローセルさんははあ、とため息をついた。

「マルコの言うことが 分かりすぎるくらい理解できるなあ」

「何だよ」

「何でもねーさ」

クローセルさんははあ、とため息をついた。

そして、表情を引き締めた。

「だが 気をつけな 俺たちみたいな悪魔は希少だぜ？」

「そうなの？翼があるから？」

「そうじゃない 普通は 人間をよく思ってないってことさ 不況を買って 取り殺されないようにしろよ」

「わかった、覚えとく」

「素直な返事も出来るんじゃないか」

その台詞でまた唇を尖らせると、クローセルさんは初めて優しく微笑んだ。

まさに天使の微笑だった。

そうだよ、黙っていたらとてもきれいな天使さんなのに。

「もつたいないよ、もつとそうやって笑ったほうがいいよ」

「はあ？」

「クローセルさんはきれいだもん、天使さんみたいだよ！」

「……ありがとう」

クローセルさんは複雑そうに苦笑すると、その場からふつと姿を消した。

残念、もう少し話していたかったのに。

マルコシアスさんと違って、白い肌と金髪碧眼は天使のイメージにぴったりだった。とても細く見えるけど自分を支えた力は本物だったし、口は軽いけど忠告もしてくれた。

マルコシアスさんといい、悪魔さんは素敵なヒトばかりだ。

でもその余韻に浸る間もなくねえちゃんとアレイさんが馬車の中

に戻ってきた。

「銀色のヒトは？」

「もう王都に送ったわ」

「え？」

「私のコインは5つもあるのよ。呼び出せるのはクローセルだけじゃないわ」

ねえちゃんはぱちりとウィンクした。

「ねえちゃんすごい！」

「一応俺たち天文学者のリーダーだからな」

アレイさんがぼそりと言った。

「そうなんだ」

「王都に到着して、王様に挨拶したらあなたも国の天文学者としてグリモワール王国に仕える立場になるわ。そうすれば、また私があるあなたの上司よ。」

「やった！ それじゃあ、今までとあんまり変わりないね。」

「そうね」

ねえちゃんはいつものように明るく笑ってくれた。

馬車はまた走り出して、王都はもうすぐそこまで迫っていた。

今まで住んでいた街、カトランジェを出発してから5日。

一行は王都ユダ・イスコキュートスに到着した。ジユデツカ城を中心に幾重にも城壁が取り巻いていて、まるで超巨大なモンブランのように見えた。

それを言うと、お前にはあの壮大なジユデツカ城があまつたるい栗に見えるのか、などとアレイさんに言われそうだったから我慢した。

「大きい街だね……」

それでも思わずほう、と息をついた。

いくつもの塔が天を指しており、それは大小合わせて50近くあるだろう。城の建物もひとつではなく、10以上の大きな建物の集合だというのが見えた。その城の周りをまず高い城壁が囲んでおり、さらにその周囲には木々が生い茂っているのが分かる。

そこから一段下がったところに大きなお屋敷がいくつも点在しているのが見えた。

さらにその周りを比較的低い城壁が取り囲んでいて、その下にはもっと小さな家がたくさん並んでいる。

そこから下は最外部の城壁が阻んでいて見えなかった。

「そうね。もっと大きな街は他にたくさんあるのだけれど、王の住むジユデツカ城があるからやっぱりそれなりに大きな都市になるわ」

「もっと大きな街もあるの？」

「そうよ。城壁で囲まれていない商業都市はもっと広いし、貿易が行われている港町はもっと人が多いのよ」

「すげえ！」

これより大きな町があるなんて、想像もつかない。

一番外側の城壁が近づいてくるのが、まるで新しい世界への扉へ近づいているようでわくわくした。

最外部の城壁を守る兵士たちはねえちゃんとアレイさんを敬礼で見送った。

「今のがインフェルノ・ゲートよ。外と王都ユダを隔てている最初の2枚の壁を合わせてインフェルノ外郭と呼ぶわ」

「街全部を囲んでるの？」

「そうよ」

二つ目の城壁を抜けると、目の前に大きな広場が現れた。

「さあ、少し降りて王都を見学しましょう」

ねえちゃんに言われて馬車から降りた。

同時にこの広場は町並みよりも少し高い丘になっていて町全体の様子が展望できる。

「ここは始まりの丘。インフェルノ・ゲートを過ぎるとまず旅人はここで町を見渡すことになるわ」

「うわあ！」

思わず感嘆の声を漏らした。

たくさん屋根が所狭しと並んでいる。オレンジ、茶色、青など色はさまざまだが、大きく十字に街を貫くメインストリートから放射状に細い道が四方八方に伸びているのがすぐに分かった。

「ここより少し高いところにもう一枚城壁があるでしょう。あれが、ブルガトリオ外郭。正面に小さく見える門がブルガトリオ門よ」

「あの、大きなお屋敷は？」

「貴族や、位の高い騎士がお屋敷や別荘を持っているの。一般人は許可がないとブルガトリオ外郭の中には入れないわ」

「ねえちゃんの家もあの中？」

「そうよ、アレイもね」

ねえちゃんはさらにその上を指した。

「そしてあれがジュデツカ城。今はゼデキヤ王が住んでらっしゃるわ。その周りを取り巻いているのはパラディソ外郭。あれを門以外から乗り越えるのはほぼ不可能よ」

「すごい！」

大きく見開いて王都の様子を目に焼き付ける。

「さあ、行きましよう。王様がお城で待ってらっしゃるわ」

「うん！」

ねえちゃん言葉に大きく頷いて、もう一度馬車に乗り込んだ。

「すごいたくさんヒトがいるよ！ 道が広い！」

小さな窓から見える景色がゆつくりと後ろに遠ざかっていく。

ゆつくりと進む馬車のすぐ近くをたくさんヒトが行き来している。馬を引いたヒトや親子連れも多い。荷車を引くヒトもちらほら見られて、どうやらここは市場のようだった。

灰色の石畳、道に沿った町並み カトランジェの街を思い出して鼻の奥がつんとした。

「ここは城下の市場よ。海からは少し距離があるけれど、ユダ川の水運が発達しているから海の幸も山の幸もすべてが集まっているわ。このあたりは平野だから、周辺地域で採れた穀物も多いわね。すべてはこの国の温暖で湿潤な気候がもたらした作物よ」

「ほんとだね」

レンガ造りの建物の前に、テントがたくさん並んでいる。

そこでは色とりどりの野菜や果物、へんてこな形の魚、カラフルな羽の鳥などが並んで売られている。

「このメインストリートの市場を抜けるとすぐプルガトリオ・ゲートがあるわ」

「買い物したいよ！」

「だめ。王様に会ってからよ」

「むー」

「落ち着いたらアレイにでも連れてきてもらいなさい」

「はあ？」

アレイさんはそれを聞いて心底嫌そうな声を出した。

「何で俺が」

「いいじゃない、仲良くなったみたいだし」

「「よくないっ！」」

二人で八モってそう叫ぶと、ねえちゃんはさもおかしそうに笑った。

「何言ってるのよ。誰がどう見ても仲良しさんだと思っつわよ？」

「嘘だー！」

「やめてくれ、こんなガキのお守りなんか……無駄遣いが関の山だ」

「ガキって言うなよ！」

突っかかると、アレイさんは紫の瞳をちらりとこちらに向けた。

「ガキにガキと言って何が悪い」

「ほらほら、やめなさい二人とも」

このやり取りにも慣れてきてしまったのが嫌だ。

「だってアレイさんが！」

「先に突っかかってきたのはお前だろう」

「だからやめなさい」

ねえちゃんがあきれたようにため息をついた。

「プルガトリオ・ゲートに着いたわよ」

「……ちっ」

アレイさんは舌打ちして、入門手続きのために馬車を出た。

不完全燃焼。

眉間にしわを寄せていたら、ねえちゃんがまた楽しそうに笑った。

「なあに？」

「あなたがそんな風に喧嘩する相手なんて初めてでしょう？」

「だってアレイさんすごくシツレイだよ」

「ふふ、でもラック、あなた楽しそうよ？」

「楽しいもんか！ 楽しんでもるのはねえちゃんだけだよ」

きつとアレイさんも同じことを言うはずだ。

ぶすくれた表情で頬杖をつくとき、ねえちゃんはまた少し微笑んだ。

SECT・14 アイリスとリコリス

プルガトリオ・ゲートを通り過ぎて向かったのはねえちゃんの屋敷だった。

「王様に謁見するときには、そんな服じゃだめよ」

ねえちゃんは自分を指して言う。

いつもの淡いグリーンの短衣に黒のハーフパンツ、ジーンズのジヤケット。左手は相変わらず包帯巻きだけど右手には黒い籠手をしている。

「これのどこがいけないんだろう。」

「んじゃどんな服がいいの？」

「そうねえ。私は天文学者の正装があるのだけれど……あなたはど
うしようかしら」

馬車は大きなお屋敷の門を抜けて、そこからかなり広い庭を抜けて、大きな建物の前で停止し、自分とねえちゃんを降ろしていった。アレイさんはクロウリー家のお屋敷に行くらしく、一緒に降りてはくれなかった。

目の前の屋敷を見上げ、王都を見たときと同じため息をついた。

「ねえちゃんのおうち、大きいねえ」

「あらそう？ジュデツカ城に比べればこんなの豆粒よ」

「いや、それはそうかも知れないんだけどさ……」

外壁が低い分威圧感はなかったが、この敷地内には明らかに5棟以上の大きな建物が林立している。

目の前の大きなお屋敷の白い壁がまぶしい。あまり縦に長くないだけかもしれませんが、自分の感覚からはずれすぎていてくらくらした。

「ねえちゃんてお金持ちだったんだ」

門から建物までの距離は果てしなく遠い。

街の花壇とは比べ物にならないほど丁寧に入入れされた庭は、は

るか地平の向こうまで続いているんじゃないかと思う。

「まあとにかく、少し休みましょう」

「う、うん」

家の前に立っていたヒトがいろいろ飾りの付いた大きな扉を開けてくれた。

「お帰りなさいませ、お嬢様」

びくびくしながらねえちゃんの後について家に入ると、ふかふかの絨毯が敷き詰められたホールと大きな螺旋階段が自分を出迎えた。手すりは金色でピカピカしている。

「ミーナお嬢様、お帰りなさいませ」

「ただいま、ばあや」

ねえちゃんは入ってすぐ出迎えてくれた老婆ににこりと笑いかけた。

「3年ぶりね。元気だったかしら」

「お嬢様こそ、ますます美しくなられて」

「もう、そんなこと言わなくてもいいわよ」

ねえちゃんは苦笑すると、後ろのほうで固まっている自分を手招きで呼んだ。

「この子と王様に謁見を申し込むのだけれど、何かちょうどいい服はあるかしら？」

「そうですね、お嬢様が若いころお召しになっていた服が少し残っています」

「それでいいわ。昼食後にすぐ出発したいの。できるかしら？」

「かしこまりました。それまでに準備を整えておきます」

白いブラウスにふわりとした淡い深緑のスカートをはいた老婆は、深く頭を下げた。

頭髮はすでに白いが、背筋はしゃんとしているし声もはきはきとして聞きやすい。少しだけ、本屋のユグばあさんに似ている。

つぶらな瞳からは温和そうな性格が見て取れた。

「ラック、その人は私の乳母だったマリーばあや。ちゃんと王様に

会える格好にしてもらってきなさい。あ、ばあや、ちゃんと風呂にも入れてね！」

「かしこまりました」

「左腕はまだ治ってないの。ついでに包帯を替えておいて頂戴！」
そう言つとねえちゃんは颯爽と螺旋階段を上つて姿を消してしまつた。

「ではラック様。こちらへ」

「え？」

ばあやに指示されるがまま、長い廊下を歩いて階段を上つて……
着いた先はどうやら浴室らしい。

とはいつても脱衣所だけで今まで自分が暮らしていたアパートの一室くらいある。

「リコリス、アイリス。お客様をお願いします」

「はい」

すみれ色のワンピースに白いエプロンをした二人の少女が進み出た。

肩くらいに切りそろえた茶髪、表情のない白い頬、大きなブラウンの瞳まで全く同じように作った人形のような少女たちだった。

「うわ、そっくり。双子？」

「はい。よろしくお願いします」

「!?!」

びっくり。

声までそろっている。かわいい！

「失礼いたします」

そう言つて片方が自分の右手の籠手をとる。

「ありがとう」

正直、左腕が動かないのでまだ一人で風呂に入るのは難しい。
きつと手伝つてくれるんだろう。

「あなたはどっち？ リコリスさん？ アイリスさん？」

「私はリコリスです」

表情を変えずに少女は答えた。

「んじゃ、そっちがアイリスさん」

もう一人の少女はぺこりと礼をする。

うん、すごく似てる。でもアイリスさんのほうがおとなしい感じ。リコリスさんのほうは少し眉がつってて気が強そうだ。この分だと声も少し違うんじゃないかな？

「おれの名前はラック。よろしくね。二人とも今いくつなの？」

「申し訳ございません、お客様。そのような質問には答えかねます」

「何で？」

「私のように下賤なものがお客様のお客様に答えるなど、もってのほかです」

「……？」

意味が分からない。

「別にいいじゃん。おれはあなたたちと友達になりたいと思った。だから聞いてる。それなのにげせん？がどうのこうのっておかしくない？ 答えになってないよ」

要するに、げせんっていう言葉の意味が分からなかったただけなんだけ。

「それは」

「おれはねえちゃんみたいなお客様じゃないよ。今だって服見たら分かるだろ？ こんなお屋敷に連れてこられてびっくりしてるんだ」
自分の籠手をほどこいてるリコリスさんになこりと笑いかけた。

「もしそれで誰かに怒られるって言うんならおれは誰にも言わないし、ここにはばあやさんもないし、だいじょうぶだよ！」

「ラック様……」

リコリスさんは戸惑っているみたいだった。

「いえ、でも、私たちは」

「だいじょうぶ」

二人を見ていて、銀髪の子たちを思い出していた。

きつとあの子たちも双子だったんだろう。

「おれはあなたたちと仲良くなりたいたんだ」

自分の中でこの少女たちと銀髪のヒトたちがだぶっていた。

この女の子たちと仲良くなれたら、銀髪のヒトたちとも仲良くなれる気がした。

「だめ？」

にこりと笑って首を傾げて見せると、アイリスは困ったようにうつむいた。

「……不思議な方ですね」

「え？」

リコリスは右手の籠手はずし終わると、ジーンズのジャケットに手をかけた。

「私たちは今年で16歳になります。城下から毎日このファウスト家に通ってお仕えしています」

左腕を動かさぬよう細心の注意を払ってジャケットを脱がせると、短衣の上につけていたベルトを外した。

脱いだ服はアイリスに手渡され、慎重に籠にたたんで入れられていた。

「ラック様は新しくグリモワール王国の天文学者となられる方だとお聞きしました。お嬢様がカトランジェの街からお連れになったのか」

「うん、そうらしいんだ」

まだ敬語なのは少し気になったが、普通に話してくれるようになったのはとても嬉しかった。

「でもおれは天文学者がどんなことをするのかよく知らないし、おれ自身のコインがいったいどんな力を持っているのかも知らないんだ」

「これがそのコインですか……」

短衣を脱いだ時こぼれ出たコインに、リコリスが恐る恐る触れる。

「あ、それはそのままでもいいよ。お風呂入るときも外したことはないんだ」

「かしこまりました」

リコリスは手を引つ込めて、また少し近づいてコインを眺めた。

「おれさあ、なんか知らないけど3年前に捨てられてたらしいんだ。それをねえちゃんが拾ってくれてさ、名前付けて、仕事をくれて、いろんなこと教えてくれた」

「名前を、ですか？」

「うん。おれさ、何も覚えてなかったんだ、その時」

「！」

リコリスとアイリスがなんともいえない表情をしていたから、気にしないでと笑いかけた。

「家族のことも、名前も、どうして自分が捨てられてたのかも。ただ一つだけ持ってたのがこのコイン。これは、俺の過去につながる唯一の鍵なんだ」

くすんだ金色でおかしな幾何学模様が描かれたコインのペンダントトップ。

右手でそれをぎゅっと握り締めた。

「王都に来たのはねえちゃんと一緒にいたかったからなんだ。コインだって過去だって本当はどうでもいい。でも、もしそれを知らないでいた時、過去が原因でねえちゃんと引き離されるようなことになつたらって思うともういてもたつてもいられなくて……」

じつとしてなどいられなかった。

銀髪のヒトと会ったのは偶然でなく必然だったのかもしれない。

「だからここまで来ちゃったんだ。本当にそれだけなんだ」

ねえちゃんと一緒にいること。それが今の自分のすべてだ。

自分の世界はぜんぶねえちゃんと共にあった。それがいつまでも続けばいい。たとえ過去を知ろうとも、名前が変わろうとも、職業が変わろうとも。

ねえちゃんの隣を離れなければいい。

「おれ今でもこんな大きなお風呂に入れてもらったりとか、世話してくれる人いっぱいいたりだとかいうのがまだ信じらんね！ 絵本

で読んだ世界に入っちゃったみたいだ」

「はははと笑うと、大人しい方のアイリスがやさしく微笑んだ。

「お嬢様はとてもお優しい方です。私達も職に困っていたところをお嬢様に拾われたのですよ」

「そうなのか？」

「はい」

「んじゃあ、おれたち拾われ仲間だな！」

「そうですね」

アイリスの笑顔はとてもやさしくて、思わずつられて微笑んだ。

でも、楽しく話していただけるのはそこまでだった。

服を脱いで風呂に入られると、花みたいに甘い匂いのするオイルで全身をこすられて、髪は何度も洗われ、のぼせるまで湯に浸かってからやっと風呂場から出た。と、思ったら顔にも腕にもツンとした匂いの液体を塗りこまれてそのあとミルクみたいなとろつとした液をかけられ……。

いくつもの液体を塗り終わってバスローブを着たところで、やっと古い包帯をはずしてもらえた。

久しぶりに傷跡を見るともう大方ふさがっていた。もう痛みもないし、肩の関節までは完全に動かせた。

「あと3日もすれば抜糸できると思います」
リコリスはそう言った。どうやら少なからず医術の心得があるらしい。

でも、左手の指がピクリとも動かないところも見ると、傷はふさがってももう一生この腕は使えないだろうと思った。

まっさらな包帯を巻いてから、今度は着せ替えが始まった。

ねえちゃんと自分の身長差は大きなりんご一個分くらいだ。ちなみに言うと、スタイルはぜんぜん違う。胸の大きさもそれこそりんご一個分くらい違うんじゃないだろうか。

「ラック様は華奢でいらっしやいますから……」

「ねえちゃんの胸がでかすぎるだけだよ」

「困りましたね」

マリーばあやさんも巻き込んで、衣装部屋をひっくり返しての大事となってしまうた。

「ばあや、どうなったの？」

そこへ、ねえちゃんが入ってくる。

ここまで来たときは違って、動きやすそうなベージュ色のふん

わりしたドレスに変わっていた。

「どうもごうもお嬢様、合つ服がございません」

「困ったわね。全部私の体に合わせた特注だから……」

ねえちゃんは腰に手を当てて眉を寄せた。

「どうしようかしら」

その時、ねえちゃんの後ろ、開けたままの衣裳部屋の扉から一人の少年が顔を出した。

「姉様？ 帰ってらしたんですか？」

「まあ、ヨハン！」

ねえちゃんが嬉しそうに微笑んだ。

「こちらにいらっしやい。大きくなったわね！」

「お帰りなさい、姉様」

こげ茶色のふわふわカールした髪に、ねえちゃんと同じ金色の瞳がきらめいている。年は12か13かそんなところだろう。

「ラック、私の弟のヨハンよ」

「おれはラックだ。よろしく、ヨハン」

「初めまして。よろしくお願いします」

サイズが合わないとはいえ、女性の服を身に着けている自分が『おれ』と言ったことに少し首を傾げたみただけけど、すぐに微笑み返してくれた。

ねえちゃんが金色の瞳の猫なら、ヨハンは子犬みたいにまん丸な瞳をしていた。

黒い細身のパンツに黒く滑らかなごつい皮ブーツ、ひらひらが縦に並んだ白いシャツの上のボタンを二つくらい留めずにはだけさせていた。

「ボタンはちゃんと留めなさい。もう今年で15になったんでしょう？」

「はい、姉様」

年齢のわりに幼い少年はボタンを言われたとおりに留めて、しゃんと背筋を伸ばした。

自分とちょうど目線が一緒だった。

「あら」

ねえちゃんはポン、と手を叩いた。

「そうよ、その手があるじゃない」

「ん？」

ねえちゃんはにこりと笑って自分を見下ろした。

王都まで乗ってきた馬車は見たこともないくらい大きくて豪勢だ
と思った。

でも、ねえちゃんの家の前に止まっていたのはそれ以上だった。

御者さんが2人いる。護衛の兵士が2人馬に乗って馬車のそばに控
えていた。

黄金の装飾がなされた大きな馬車には、すでにアレイさんが乗り
込んでいた。

「お前……」

入ってきた自分を見て、アレイさんは頭を抑えた。

「どういう理由でそんな格好になったんだ？」

「んとね、ヨハンに借りた」

それはまだ騎士の身分ではない若者がグリモワール国の名の下に
任務を遂行するときを使う、見習い騎士用の正装だった。天文学者
の資質がないヨハンは騎士を目指していたというのだが、15の誕
生日と同時に騎士の位をもらい、今ではこの服を着ることもないら
しい。

銀の脛当てから細い足が伸びる。燕尾服のような形の硬い黒の外
套を腰の幅広ベルトで止めて、黒い手袋をはめる。さらにその上か
ら白のマントを装備した。

若干暑いが我慢するしかない。

「……」

アレイさんはなんとも言えない表情をした。

いつも表情がない分、こんな顔をするのは珍しい。

「仕方ないわ、本当はドレスを用意したかったのだけれど、私の服が合わないんですもの」

「……そうだろうな」

「残念だったわね、ドレス姿のラックが見られなくて」

「……」

アレイさんはねえちゃんの言葉にふいとそっぽを向いた。

別にアレイさんは自分がどんな格好をしているのかなんて気にしないだろうに。

くすくす笑ったねえちゃんはこれが本当に正装なんだろうかと思うような、胸元が大きく開いたとてもシンプルなドレスを着ていた。黒一色で飾りがない分、体のラインが浮き彫りになる。それを、裏地が紫色のマントで少しだけ隠していた。

ドレスにマントというのはとてもおかしい感じがした。

「これは女性の天文学者の正装なの。天文学者の位を表す色は黒、そして国を守る役職につくものはマントを羽織ると決まっているわ。何より、古来の女性天文学者は『ウィッチ』と呼ばれ恐れられていた。伝承に残る彼女たちは黒のワンピースに黒のマント……つまり、今の私に近い姿をしていたと言われているのよ」

上半分には全く飾りがなく滑らかなシルクが体をびったりと覆い、細身のスカート部分には銀や金、赤の糸で何か細かい紋様が縫い取られていた。金のチェーンで作られた細いベルトには、くすんだ鈍い光を放つコインが5つ、並んで吊り下がっていた。

髪をアップにしたねえちゃんは小さな紅玲玉ルビのピアスや動くトシヤラシャラと軽快な音を立てるネックレス、それに胸には輝光石ダイヤモンドがふんだんに埋め込まれたブローチをつけていた。

黒の中でそのアクセサリーたちは闇夜の星のように煌いていた。

「アレイさんはいつものマントと違うね」

闇色のマントではなくて、ねえちゃんと同じ上質の糸で織られた裏地が紫のマントだった。

アレイさんはどちらかというと自分に近い格好で、やはり黒を基調にした長い外套を羽織っていて、腰にはねえちゃんよりしつかりした幅の広いベルトにコイン嵌め込んでいた。外套にはねえちゃんのドレスと同じように細かい紋様が刺繍してあって、よく見るとそれはコインに描かれた幾何学模様酷似していた。

「これは男性用の正装だ」

「ふうん。おれの格好と似てるね」

「お前と同じ服を着た記憶はない」

アレイさんは絶対自分を嫌ってると思う。

「似てるって言っただけじゃないか！」

「ラック、ジュデツカ城に入ったら絶対そんな大声出しちゃだめよ？ アレイももう24になるんだから子供をからかうのはやめなさい。」

「わー、ねえちゃんまでおれのこと子供って言った！」

ひどい！

「もう、ラックだって20近い年のはずよ？ おとなしくしてなさい！」

「むー」

唇を尖らせて黙りこんだ。

ねえちゃんは窓の外を見ているアレイさんとむっつりと黙り込んだ自分を交互に見て、大きなため息をついていた。

ゆるい坂を馬車が上がって、最後の門に辿り着く。

今度はわざわざ降りて手続きをするなんてことはないらしい。いったん停止した馬車は、すぐにまた動き出した。

「さあ、ジュデツカ城に入るわよ。頼むから、おとなしくしてなさい！」

ねえちゃんに念を押されたので、こっくりと頷いた。さすがに緊張してきたぞ。

馬車を降り王様のいるジュデツカ城を目前にして、緊張は頂点に

達した。

城に一步足を踏み入れると、ねえちゃんが自分の家を豆粒だといった理由がよく分かった。

くらりとするくらい真つ赤な絨毯がまっすぐに敷き詰められていて、壁と柱は全部最上級の大理石だった。廊下は地の果てまで続くんじゃないかと思うくらいに長い。天井は絶対届かない高さだし、天窓からは太陽の光がきらきらと差し込んでくる。

何より、目の前にある空間が広すぎる。

脇のほうに飾ってある絵画や工芸品も見ただことないものばかりで、自分の頭ではどうにも処理できそうになかった。

前に進もうとして、足が動かないことに気づいた。

あれ、息がうまく出来ない。体も動かない。あまりに今までと違う世界に放り込まれたから脳みそがびっくりしちゃったみたいだ。心臓の音が耳元で聞こえる。

おれ、ここでいったい何してるんだろう？

目の前が真つ白になりそうだった。

「行くぞ、ガキ」

ぱしん、後頭部をアレイさんにはたかれた。

「もうっ、何するんだよ！」

「もたもたするな。そんなところで突っ立っていたら日が暮れる」

「!!!」

むっかー。

怒鳴り返そうとした瞬間、ねえちゃんの手が自分をさえぎった。

「静かにしなさいって言ったでしょ、行くわよ、ラック」

しぶしぶねえちゃんについて歩き出して、ふと気づいた。

体が軽い。さっきまで緊張で全く動かなかったのに。

「アレイさん……」

まさかでもあのヒトが自分を助けてくれるとは思えない。

それでも助かったことだけは確かだったから、心の中でだけお礼を言った。

ありがとう、アレイさん。でも、絶対本人に言ったりなんてするもんか！

SECT・16 ゲーティア「ゼデキヤ」グリモワール

お城の中をどう歩いたのか分らない。きつと一人放り出されたら二度とこの建物から出られないだろうと思った。

いくつも扉をくぐって、階段を上って、長い廊下を歩いて行き着いた先は今まで見た中で一番大きくて豪華な扉の前だった。黒い翼の獅子が彩る紋章が掲げてある。

これがグリモワール王家の紋章なのだろうか。

目の前で扉が開いた。

明るい光が差し込んでくる。

ねえちゃんとアレイさんがゆっくりと扉の中に足を踏み入れた。

「ただいま参上いたしました」

二人が赤い絨毯に膝をついて挨拶した。

ふいと見上げると、目の前の壇上に大きな椅子に座ったおじさんがいた。その背後が窓になっていて光が差し込んでいる。逆行でよく見えないが、重そうな冠を頭に載せて、暑そうな毛皮のマントを羽織っていて、口ひげをたくわえていて……その姿が絵本の世界で見た王様そのもので少しおかしかった。

その壇の下には左右に一人ずつ騎士が控えていた。純白の甲冑に身を包んだ騎士と、漆黒の甲冑に身を包んだ騎士。身の丈以上ある槍を持ち、身じろぎ一つせず直立不動で立っていた。

「ぼーっと壇上のおじさんを見上げていると、ねえちゃんとアレイさんはもう一度立ち上がって進み出た。

おじさんがいる壇の真下まで来て、もう一度頭を下げる。

とりあえず、慌てて二人に付いて行き、見よう見まねで膝をついた。

「堅苦しい挨拶はよい。今回はグリフィス家の末裔にグリモワール王国レメゲトンの位と使役するコインを与えるために呼んだのだ」

「はい」

ねえちゃんは自分のほうを振り向いて、前に進むよう促した。
仕方がないので立ち上がってねえちゃんとアレイさんの間を通り、
壇に近づいた。

「すぐ上のほうから、光とともに声が降ってきた。」

「名は？」

「ラックです」

まぶしい。思わず目を細めた。

「ふむ。少女と聞いていたのだが？」

「申し訳ございません。なにぶん急なことで正装は間に合わず……」

「そうか」

その声から何の感情も読み取れなかった。年齢も分りにくく、
ごく低くはないけど高くもない、特徴のない声に聞こえた。

「少女、これからはグリフィス家の末裔としてラック＝グリフィス
を名乗るがよい。グリモワール王国レメゲトンの位と、第2番目の
悪魔アガレスのコインと第64番目の悪魔フラウロスのコインを授
ける」

「……ありがとうございます」

なんだかよく分からなかったが、とりあえず頭を下げてみた。

部屋の横にある扉が開いて、女のヒトがお盆を持ってこちらに向
かってきた。

「第2番目の悪魔アガレスは地震を、第64番目の悪魔フラウロス
は地獄の業火を操るといふ。グリモワール王国のため、我がために
日々精進せよ」

女のヒトが持ってきたお盆には二つのコインが乗っていた。

貰っていいのかなと思ってねえちゃんを振り向くと、ボーっとし
てないではやくコインをとりなさいと目で叱られた。

お盆の上からコインを貰って、ねえちゃんとアレイさんの後ろに
下がった。

「下がってよいぞ。詳しいことは後ほどヴァイヤー老師が伝えるだ
らう」

「はい」

最後に部屋を出るときもつ一度三人で深く礼をしてから、その広間を後にした。

今の一連の流れは、一応踏まなくてはいけない手順の一つらしい。国が与える天文学者の地位、つまり『レメゲトン』と呼ばれる者に位を与えるには、二人以上のレメゲトンと二人以上の騎士団長がいる前で王様が宣言せねばならないのだという。

「めんどくさいんだね」

「そうね、ゼデキヤ王もいつも同じことをおっしゃるわ。でも一応古くからのしきたりだから最も簡単な方法で手順を踏むことにしているの。と言っても、あなたの前にこの儀式を受けたアレイの時がもう4年前だから、もう何年かに一回しか行われていないのよね。大昔、72人の天文学者をそろえていた時代はもつと年に何回かあったらしいのだけれど」

「へえー」

「ゼデキヤ王も普段はもつと気さくな方よ。もつとも、今は公務がお忙しくてほとんどお会いできないのだけれどね」

控え室としてあてがわれた部屋で、出された紅茶を飲みながらヴァイヤー老師が現れるのを待った。

紅茶は今まで味わったことのない深くまるやかな風味だった。

おいしい。これでケーキが出れば言うことなしなんだけど。

「グリフィスって、この間の昔話に出てきたゲーティア「グリフィスって」天文学者のこと？ おれ、そのヒトと何か関係あるの？」

「ええ、あなたはおそらくグリフィス家の最後の生き残りよ。もつとも、グリフィス家自体何十年前前に滅亡したといううわさだったのだけれど、なぜか生き延びていたようね」

「じゃあ、おれはこれからラック「グリフィスって」ことになるのか？」

「そうよ」

「ねえちゃんはそのこと、知ってた？」

「……知っていたわ。黙っていてごめんなさい」

「ううん、いいよ。だって知ったらねえちゃんと離れ離れになつたかもしれない。でも、これからは、ラック・グリフィスになつても一緒だよね！」

「そうよ。大丈夫、私があなただを守つてあげるわ」

ねえちゃんが笑いかけてくれたので笑い返した。

「それよりもこの服、暑いし肩がこりそうだ。もう着替えたいよ！足は重いし……」

「もう少しよ。ヴァイヤー老師に会つたらうちに帰つて夕飯をいただきますよ」

「はい」

「やれやれ……こんなのがレメゲトンとは。先が思いやられるな」
アレイさんははあ、と深くため息をついた。

「大丈夫よ。この子は今までにない強力な力を持つことになるわ。それ以外の事は私達がフォローしていかなくちゃ」

「冗談は休み休み言ってくれ。こんなガキのお守りなんか真つ平だ」

「ガキって言うな！」

「うるさい」

アレイさんは紫の瞳を細めて忌々しげにつぶやいた。

「ゼデキヤ王の意図が分らん。こんなガキにフロウラスだと？このガキを体よくつぶしにかかったとしたかと思えん」

「違つわ、アレイ。ゼデキヤ王はこの子の秘めたる力をお見抜きになつたのよ」

「だからと言ってそこでなぜそのコインが出てくるんだ。せめてもう少し大人しいコインで修行を積んでから……」

「若造、何も分つておらん」

そこへしゃがれた声が割り込んだ。

「ヴァイヤー老師」

「すでに悪魔と契約した天文学者がもつと強い悪魔と契約するには一度目の何倍もの力がある。逆に、最初に契約した悪魔が強ければ

強いほど次の悪魔との契約は簡単になる。力とはすなわち精神力。いくなれば意志の固さだ」

老師という名前がまさにぴったりな白髪の老人がそこに立っていた。

褐色の肌には何本もしわが刻まれ、床まで届く濃い紫色のローブから除く手首は骨と皮だけになっていないかと思えるほどに細い。それでもしわの奥に光る青い瞳は、まったくその鋭さを失ってはいなかった。

「お主がグリフィス家の末裔か……女だと聞いたのは己の聞き違いか？」

「いえ、正装を支度する暇がなくヨハンの着ていたものを拝借したしだいです、老師」

「そうか」

老師はゆっくりとした足取りでテーブルに着き、紅茶を持ってきた侍女に軽く礼を言った。

「名はなんと言う？ 少女。」

「えーと、ラックです」

「ラック＝グリフィスと名乗りなさい。それに、目上の人には敬語を使うのよ」

ねえちゃんが正した。

「ラック＝グリフィスです。よろしくお願いします」

「そうそう、これから人に名乗るときはそう言うのよ」

「はい」

その様子を見て老師は目を丸くした。

「精神年齢が低いんだよ、このガキは」

「ほう」

「私が3年前に拾った時には過去の記憶すべてをなくしていたわ。

一体何があったのか分からないのだけれど、その時この子は全身にひどい傷を負っていて声も出せない状態だった……最初の1年丸々かけて回復して、2年間で探索者の仕事をちゃんとこなすようになった。

ったの。おそらくその影響があつて今のこの子の精神年齢が形成されたんじゃないかと思うわ」

ねえちゃんがそう言つて自分の頭にぼんと手を置いた。

その手の感触がうれしくて、思わずにこつと笑つてしまった。

「この子の心はまだ何色にも染まっていないの。何も知らない無垢な心を持つているわ。この子を天文学者にするなんて……私だつて本当に嫌だつたわ。でも、そうしないとこの子を私の傍においておくことは出来ない。逆に言えば、たとえレメゲトンになつたつて私の傍にいさえすれば守ることが出来るもの」

「おねえちゃんと一緒にいるよ？ どこにも行かないよ？」

「そうね」

「刷り込みのようなものか。鳥は最初に見たものを親と信じてどこまでもついていくという」

老師は軽く息をついた。

「この鳥頭が」

アレイさんは鼻を鳴らした。

「まあよい。お主が国を裏切らない限りこの少女も国に仕え続けるだろうからな」

老師は青い瞳で自分をまっすぐに見つめた。

「己が来たのはそのコインがどのようなものか、お主はこれからどういう立場になるのか、そして悪魔を使役するにはどうすればいいのかを伝えるためだ」

その青い瞳をまっすぐに見つめ返して、こくりと頷いた。

「今回ゼデキヤ王は第2番目アガレスと第64番目フラウロスをお主に与えた。アガレスは地震を起こす力を持ち、フラウロスは地獄の業火を操る力を持つという。どちらも恐ろしく強大な力を秘めたコインだ」

「どんな悪魔さんたちのの？」

「アガレスは老いた紳士の姿で現れるという。その姿は優美にして壮麗だが、その言葉に曖昧さが多く入り混じる。伝承によるとまる

で問答のようにして会話を進めるらしい」

「問答ってなぞなぞのこと？」

「そうだ。アガレスの言う言葉を真に受けてはならん。そこには確かに真実があるのだが、それは幾重にも折り重なった霞の奥に隠された至宝だ。アガレスの言葉を何度も何度も噛み砕いて考えるとよい」

「こいつにそれが出来るわけがない」

「出来ないかもしれないけど、がんばるもん！」

アレイさんを一瞬睨んでから、もう一度老師に視線を戻す。

「もう一人のほうは？ えーと、フラウロスさん」

「フラウロスは大きな一頭の豹の姿で現れる。人の姿もとるが、それはごく稀らしい。色は炎のように燃え盛るオレンジに黒の奇怪な斑点がある。瞳は燃え盛る炎の色だ」

先ほど手にした二つのコインを並べてみる。

地震を起こすなぞ好きなアガレスさんの方はつぼが笑っているような模様で、炎を操る豹のフラウロスさんの方は鳥の羽を広げたような模様だった。

そこに、もともと持っていたコインを並べてみる。

お化けが何匹も顔を出したり引つ込めたりしているような模様。

なぜかこのコインだけ熱を持っている気がして、ゾクリとした。

「そのコインは使わんでいい。お主の過去への道しるべとして大事に持っておきなさい。グリフィス家の末裔である証だ」

「このコインの悪魔さんはどんなヒトなの？」

「……使わんのだから知らんでいい」

老師は吐き捨てるように言った。

他にも二つコインがあるし、この過去を知るコインを使う必要はなさそうだ。

言われたとおりにまたコインを胸元にしまった。

「時に聞くがお主、コインはいつもそこにあるのか？」

「そうだよ。寝る時もお風呂はいる時もずっとつけてるよ」

「何と！」

老師はしわの奥の細い目をいっぱいに開いた。

アレイさんは頭を抑えた。

「ゼデキヤ王がアガレスとフラウロスのコインを託すわけだな。何という耐性の強さだ。この若造並みではないか」

「？」

首を傾げてねえちゃんを見ると、困ったように微笑んだ。

「悪魔のコインは普通の人にとっては毒みたいなものよ。近くに置き過ぎると体調を崩したり精神に異常をきたしたりするの。でも、私たち天文学者になる者は悪魔のコインに対する耐性を持っていて、少しくらい持つていても平気なのよ」

「耐性の強さは人によって違う。俺やねえさんはそれなりに強いが

……」

「アレイ、あなたみたいな鉄の耐性と私を一緒にしないでくれる？」

「だがこのくそじじいはそろそろ無理だろ」

「年寄りを敬え、若造」

「うるせえくそじじい。年を考えてそろそろ引退しやがれ」

アレイさんが口汚いは自分にだけかと思っていたが、もしかすると特別なのはねえちゃんに対する態度の方で、普段は誰にでもこんな風に無遠慮な態度をとっているんじゃないだろうか。

「お主が一人前になったら考えてやらんこともない」

「だったらせめてコインの数を減らしやがれ！」

「己以外に老賢者フルカスと話せるものはおらんよ」

アレイさんはちつと舌打ちした。

「アレイもずっとコインを手首につけたままよ。私やヴァイヤー老師は普段体から離して保管しているわ」

「おれはどうしたらいい？」

「そうね、3つとも癖のあるコインだから……身につけていた方がいいかもしれないけれど、コイン同士はあまり近づけない方がいいわね。明日にでも加工してあげるけど、仕方ないから今日は一緒に

首に下げておきなさい」

「はい」

素直に返事をする。老師は穏やかに微笑んだ。

「己に孫がおっいたらこのくらいか」

「んじゃあ、おれにじいちゃんがいたら老師さまくらい？」

「……そうかもしれないわね」

「じい様って呼んでいい？」

「かまわんよ」

うれしい。

思わず笑みがこぼれた。

「仕方がない、孫のためじい様はがんばるとするか」

老師改めじい様は椅子から立ち上がった。

「今日中に魔方陣を完成させておく。明日また来るといい。神殿で待っておる」

「よろしく願います、ヴァイヤー老師」

ねえちゃんは立ち上がって深く頭を下げてじい様を見送った。

「おれ、これからどうなるんだ？」

「おそらく半年ほどかけて悪魔を呼び出して使役する練習をするわ。そのあとは、地震と炎の力を使って軍備に組み込まれることになるでしょうね。アレイが炎妖玉騎士団、私が輝光石騎士団タイアモントに所属するよ。ここにどこかの騎士団にレメゲトンブランクルビとして所属することになるわ。

このぶんで行くと、王都在住の漆黒星騎士団でしょうね」

「さつき王様のところで黒い鎧を着てた人が団長さんなんだよね」

「そうよ。騎士団に所属したら、その後は私と一緒にコインを探す命を受けることになるでしょう」

「ほんとー！」

ねえちゃんと一緒に。それがすべての願いだ。

「本当よ。さあ、そのためにも半年間がんばらなくちゃいけないわ」

「うんー！」

「明日は初めて悪魔を呼び出すことになると思うわ。すごく疲れる

と思うの。でも、あなたなら大丈夫よ、ラック」

ねえちゃんがまた少しだけ悲しそうに微笑んだ。

「だいじょうぶ。がんばるよ！」

心の底からそう言ったが、ねえちゃんの悲しそうな表情を拭い去ることは出来なかった。

ねえちゃんの家に戻って夕飯を済ませると、自分にあてがわれた部屋に戻った。

今まで住んでいたアパートの部屋の3倍以上はある。ベッドの大きさもそのくらい違う。いくら転がっても落ちないはずだ。ふかふか具合もぜんぜん違っていて、端っこのほうに座ると押し戻されてしまいそうなくらいに弾力があつた。

それ以外にも部屋には、何枚も服の入る洋服ダンスやゆうに3人はいっぺんにお化粧できそうなドレッサー、それこそ今まで使っていたベッドより大きなソファ、それから家族が食事できそうなくらいに大きなテーブルもあつた。

行くときに着せられた服をいったいどうしようかと途方にくれていると、アイリスとリコリスの双子の姉妹がやってきた。

「今日からラック様のお世話係を命じられました」

「よろしくお願いします」

「ほんと！ やったあ！」

駆け寄るうとして、異様に足が重いのを思い出す。

「ごめん、早速で悪いんだけど、着替えたいんだ……手伝ってもらえるかな？」

「もちろんです」

リコリスがさつと前に進み出ると、慣れた手つきでマントからはずしていく。

アイリスはその服を受け取って片付けていった。そういう風に役割分担しているらしい。

寝巻きに着替えさせてもらって、それからソファで包帯を取り替えてもらった。

「ねえリコリス」

包帯を巻いていたリコリスは大きな茶色い瞳をこちらに向けた。

「なんでしょ」

「天文学者……レメゲトンてさ、どんな仕事してるのか知ってる？」
「そうですね。私たちのような平民にとってはとても遠い存在ですから、どちらかというと言昔話として耳にすることのほうが多いかもしれません。太古の天文学者は占星術を駆使して未来を読み、悪魔の力を駆使して戦争を勝利に導き、グリモワール王国の繁栄の時代を築き上げたと聞いています」

「ふうん。それって、占うひとと戦うひととに分かれてたってことなのかな」

「そうですね。今でもその二つは分かれています。お嬢様が戦闘に参加されることは少ないですが、同じ天文学者のクロウリー伯爵は騎士団の一員として鍛錬を欠かさないと聞きます」

「クロウリー？」

「クロウリー公爵家のご子息で、今では炎妖玉騎士団ガーネットに所属される騎士でもあり、レメゲトンのお一人でもあります。お嬢様とも交流が深く、その血筋を辿ればレイシアWクロウリー様にも通ずるとか」

「もしかしてそれってアレイさんの事？」

「そうですね、アレイスターWクロウリー伯爵。お目にかかったことはないのですが、黒髪に紫色の瞳のとても見目麗しい方だと噂には」

「ミメウルワシイって言うと、綺麗だってことだよ」

「そうですね」

「そうだね、アレイさんは綺麗だと思うよ」

腰まで流れるつややかな黒髪と端正な顔立ちはとてもよく合っているとと思う。切れ長の涼しげな眼の中に納まっている紫の瞳に灯る理知的な光は好きだし、かなり見上げなくてはいけないがすらりとして引き締まったとても綺麗な体のラインをしている。

「でもね、アレイさんよりもアレイさんの悪魔さんのほうが綺麗なんだよ。マルコシアスさんって言うの」

「第35番目の悪魔のマルコシアスですか？レティシア＝クロウリ
ーと共に戦った勇壮な戦士だという」

「うん。肌が褐色でね、目が猫みたいに鋭くて青と赤が一つずつな
んだ。鍛えてあるけどしなやかで、すごく強そうな感じ。でもね笑
つてくれるとちよつとどきどきする」

「そうですか。ぜひ見てみたいものです」

「きつと一度見たら忘れられないよ！」

イチド 見タラ

「青い刃の剣と赤い刃の剣を一つずつ持っててね……」

忘レラレナイ

「一つずつ……」

一瞬で惹きこまれて逃げられなくなる。あの深い群青色の瞳が脳
裏に焼きついて離れない。銀色の髪と陶磁器のように滑らかで真っ
白な肌に吸い込まれそうなほどに魅入られた。

あの時のフラッシュバックがもう一度返ってきそうになる。

が、なんとか押しとどめて目を閉じる。

でも、銀色の面影はまぶたの裏から消えてくれなかった。

「どうなさいました、ラック様」

「……あのね、もう一人いたんだ、すごくきれいなヒト。そのヒト
の事思い出してた。」

もう何十回もねえちゃんに向かって繰り返した台詞だ。

「青がちよつと入ったさらさらの銀髪で肌の色はすごく白くて昔の
ヒトが削った彫刻みたいなんだ。瞳の色がすごく深くて暗い群青色
だけど、そのヒトのオーラが炎と同じ色だから……」

言葉はそこで止まってしまった。

これ以上あのヒトを言葉に表すのは無理だった。

会いたい。会いたい。

低くてよく通る声を聞きに。柔らかな銀の髪に触れに。炎のよう
なオーラを感じたい。

理屈じゃなく会いたい。話したい。何を話すかなんて分からない

けれど……。

その瞬間唐突に理解した。

そうか、自分は一目であるヒトの虜になっていたんだ。

それは理屈でなく感覚だった。でも、その感覚はすんなりと自分の中に納まった。もやもやとしていた部分をすっきりとさせてくれた気がした。

ぼんやりと中空を見つめる。

「どうかなさいましたか、ラック様」

「銀髪のヒト……探しに行かなくちゃ」

あの日、路地裏で見つけた瞬間からきつともう

寝巻きのままふらりと立ち上がった。

「ラック様！」

部屋を出て行くこうとすると、アイリスが血相を変えて止めようとした。

「おやめください、どこに向かうおつもりですか?!」

「銀髪のヒトに会いに行くんだ」

「それはどなたです?!」

「わかんない。でも、ねえちゃんが王都に送ったって言ったんだから近くにいますよ」

「もう遅いのです。明日になさってください。お嬢様にも聞いてみないと」

「いったい何の騒ぎ?」

アイリスの声を聞きつけたねえちゃんがやってきた。

「お嬢様! ラック様が……」

アイリスに続いてリコリスも部屋を飛び出してきて、眠っていたヨハンも起き出してくるしはあやもやって来るので大騒動となってしまう。

ねえちゃんはその事態を治めるためかは知らないけれど、こう言ってくれた。

「明日、ちゃんと悪魔と契約を結ぶことが出来たらきつと銀髪の人

たちに会わせてあげるわ。絶対よ。約束するわ」

「ほんと?」

「本当よ」

「んじゃあ今日は我慢する」

「そうなさい。疲れているはずよ、ゆっくりお休みなさい」

「そうだ。確かに足は棒のように重いし、頭もぼんやりする。左手は相変わらず動かない。」

「どうしてこんなこと言い出してしまったんだろう。こんなに夜も遅くて、疲れているのに……。」

ねえちゃんは部屋のベッドまで付き添ってくれた。

横になった自分にまっさらのシーツをかけながら、ねえちゃんは困ったように言った。

「いったいどうしてこんなこと言い出したの」

「んと、アレイさんの話をして、そしたら銀髪のヒトの事思い出して……思い出したらすぐ会いたくなっただ。んーでも、何であの瞬間だけあんなに急に会いに行こうと思ったのかはわからない」

「そうなの。コインを3つ身につけたせいで少し精神が不安定になっっていたのよ。それにしてもあなたはよっぽど彼らのことが気に入ったみたいね。何度も殺されかけたって言うのに……おかしな子」

「ホントに何でだろう。自分でもわからないや」

「彼らは私たちの敵なのよ。出会ったら殺し合いを始めなくちゃいけないくらいにね」

「殺し合い……?」

「そうよ。きつとあなたはそううちすごく悩むことになるんですよね。私はそんなところ見たくないのに」

「ねえちゃん?」

「あなたはすべてを知った時いつたいどうするのかしら。それでも私と一緒にいたいといってくれるのかしら……?」

ねえちゃんは悲しそうに微笑んだ。

どうしてだろう。最近はずっとねえちゃんに悲しい顔をさせてばかりだ。

「ごめんなさい、ラック。私があなたにしてあげられることなんてほとんどないの」

「なぜ？　ねえちゃんは隣にいてくれるのに？　おれはそれだけが望みなのに？」

「あなたはきつとそのうち私よりずっと大切なものを見つけるわ」

「わかんないよ、ねえちゃんより大切なものなんて思いつかないよ」

「いいのよ、今はわからなくて。そのうち少しずつ分かってくるはずだわ」

「分かりたくないよ」

「でも今は銀髪の人の事を考えていたんでしょう？　その間、私のことなんて頭になかったはずだわ」

「そうだけど、ねえちゃんのこと考えてる間は銀髪のヒトのこと忘れてたよ？」

「今はまだそうなんでしょうね」

ねえちゃんは泣きそうな顔をしていた。

「いったいねえちゃんは何を悲しんで、何を恐れているんだろう。」

自分にはまだ分からない。

それでも、ねえちゃんがこの瞬間に心のどこかで自分に決別を告げた気がした。

「ねえちゃん」

「なあに？」

「一緒に寝よう……昔よくしてたみたいに」

「すぐ切ない気分になって、ねえちゃんと離れるのが嫌になって、思わずそんなわがママが口から出た。」

「しょうがない子ね」

ねえちゃんは困ったように笑うと、横になった。

ブロンドの髪が顔をくすぐって、思わず微笑んだ。

「くすぐりたい」

「ばかね」

ねえちゃんの柔らかい手が頭をなでてくれる。それから頬に一つキスをしてくれた。一緒に寝るときや眠れない夜にはいつもそうしてくれていたように。

やさしい眠りが近づいていた。

「おやすみなさい、ラック。明日から忙しくなるわよ……」

SECT・19 アレイスターⅡWⅡクロウリー

悪魔の召還儀式はできれば慣れた服と慣れた武器を身につけているほうがいいと言われた。

とは言ってもいつものような短衣ではパラディソ・ゲートの中に入れないらしい。

仕方がないので着替え用にいつもの服をバッグにつめて、今日もヨハンのお下がりで出かけることになった。

今日もアレイさんが一緒に来てくれた。初めて会ったときと同じ闇色のマントを身につけていた。

確かにリコリスが言っていたように、アレイさんはミメウルワシかった。

「何だ？」

あまりにじろじろ見ていたらアレイさんに不機嫌な顔をされたけど、それはいつものことだ。

「アレイさんは綺麗だね」

「は？」

眉間にきゅっとしわがよる。

アレイさんの闇色マントと口の悪さとこの表情はあんまり好きじゃない。

「いったい何を言い出すんだ。とうとう頭がイカれたかこのガキ」

「おれはいつだって本気だし思ったことしか言わないよ」

「だったらもともとイカれてんだな。いっぺん殴ったら戻るんじゃないのか？」

「殴られたら殴り返すからね」

唇を尖らせて睨み返した。

するとアレイさんは忌々しげに呟いた。

「……お前はだんだん生意気になっていくな」

「アレイさんのせいだよ！」

「本当にそうだわ」

ねえちゃんはくすくす笑った。

昨日の夜言ったことなんて気にしてないように……でも、どこか少しだけよそよそしい感じがした。

なぜだろう。ねえちゃんはなぜあんなふうに自分を遠ざけるようなことを言ったんだろう。

こんなに近くににいるのに、すごく遠く感じる。昨日まではずっと隣にいたのに。

「今までそんな風にラックと言い合える相手はいなかったものね」
「……」

「よかったわね、ラック。アレイだけじゃないわ、老師様もきつとあなたのことを気にかけてくれるわ。ゼデキヤ王も、漆黒星騎士団ブラックルビー長のフォーチュン侯爵もお力になってくれることでしょう」

「ねえちゃんも一緒にいてくれるんでしょう？」
急に不安になった。

「そうよ。絶対にあなたを守ってあげる。何があっても、必ず」
「ほんと？」

「ええ。あなたが望む限り」
どうしてだろう。こんなに近くに別れの足音が聞こえる。

昨日から唐突に。
すごく不安なんだ。

一体何があったんだろう。
「大丈夫よ、ラック。」

だいじょうぶってという言葉にはどのくらいの心が詰まっているんだろう。

寂しさとか強さとか優しさとか、いろんな感情を全部合わせてぎゅゅとつめたその言葉はこの不安を消し去ってやってくれないだろうか。馬車は神殿に到着して、目の前の大理石で出来た大きな建物に圧倒された。

これから起こることが不安なんて、そんなこと今まで思ったこと

もなかったのに……

重い扉を衛兵が開いて3人で神殿に足を踏み入れた。

大きな教会のような建物だった。天井には虹色のステンドグラスが煌いていて、まっすぐ見つめた先には王家の紋章を象った天窓が光を与えていた。

「おはよう、じい様」

「早かったな」

じい様はその広いホール中央で待っていた。

「老師、おはようございます」

ねえちゃんとアレイさんと3人でじい様のところに行くと、じい様は持っていた杖でどん、と床を突いた。

「?!」

その瞬間、その部分の床がずずず、と重い音を立てて沈み始めた。

「うわあ!」

「地下の部屋に入るだけよ」

「すっげえ!」

目の前を床の線が通り過ぎていき、みるみる地上の光が遠ざかった。

数秒後、広い空間が目の前に広がった。

薄暗いのは明かりが壁に灯されたランプの光だけだからだろう。

大理石が敷き詰められた床には一面にびっしりと真っ黒な模様が記してある。

「……………」

「ここは悪魔と契約を結ぶ儀式に使う部屋だ」

「歴代のレメゲトンがここで幾人もの悪魔と契約を交わしてきたのよ」

コツリ

静かな地下の空間に靴音が響いた。

「動きやすい格好に着替えなさい。すぐに始めるわよ」

「わかった」

ねえちゃんに手伝ってもらっていつもの服に着替えた。

その間中アレイさんは居づらそうにそっぽを向いていた。

「お前たちは……着替えるならもつと隠れてやれ！」

「あら仕方ないじゃない。他に場所がないんですもの」

アレイさんは珍しくねえちゃんに対して怒鳴っていたが、老師は
はあ、と大きなため息をついただけだった。

紺のアンダーウェアにワーキングパンツ、淡いグリーンの短衣、
ベルトには短剣を差した 凧らずも、初めて銀髪の人と会った
時と同じ格好だった。

もう左手は動かなくなってしまったけれど。

始まりの朝のことを思い出すと、少し落ち着いた。

いつものようにアパートを出て、灰色の石畳を駆け抜けてマスタ
ーに挨拶して、ねえちゃんにお金をもらってケーキ食べるつもりで

……

「ねえちゃん」

「なあに？」

「今日さ、帰ったらケーキ食べたいな」

思い出したらケーキを食べたくなった。

「いいわよ。一番好きなクリームたっぷりのフルーツケーキを用意
するわ」

「やった！」

よし、これで気合が入ったぞ！

右腕だけで伸びをしてから、じい様の元へ向かう。

「準備はよいか？」

「うん」

「召還した悪魔の言葉に耳を傾け、その問いに答え、血で契約をせ
よ。力とはすなわち意志の力。どれだけ強く自分を信じられるかだ」

「……よくわかんない」

「とにかく自らの意思をしっかりと持て。迷うな。じい様がお前に言

えるのはそれだけだ」

「わかった。そうする」

「ラック、悪魔さんの話をちゃんと聞いて、きちんと答えるのよ」
「うん」

もつと他に言いたそうな顔だったけれど、ねえちゃんはそれ以上何も言ってくれなかった。

じい様の導きで、一つの魔方陣の前に立った。

この模様は見覚えがある。ねえちゃんが以前戦いでクローセルさんを呼び出した魔方陣ととてもよく似ている。

その中央に描かれているのはまるでつぼが笑ったようなマーク

第2番目の悪魔アガレスのコインに記された紋様だ。

アガレスさんはなぞなぞが得意、地震を起こす力を持っている。

口の中でそう反芻してから一歩踏み出した。

「おいこそガキ」

カチンと来て一瞬迷ったが、振り返った。

アレイさんの紫色の瞳は、不安の色を浮かべていた 初めて見

るその色に驚いて立ち尽くす間にアレイさんは自分のほうに近寄ってきた。

「なあに？」

アレイさんが近くに立つと、自分はかなり見上げなくてはいけない。そうするとなんだかアレイさんが遠くなったように感じるのだ。近づくと少し遠ざかるのって、矛盾しているなと思う。

首をいっぱいに見上げていると紫の瞳が近づいてきた。

びっくりして動けないでいると、アレイさんの肩が額に触れた。

気がつくとも腕は自分の背中に回っていて、大きく腕の中に抱きかかえられたような格好になっていた。

いったいどうしたんだろうと動くほうの右手でアレイさんの背に触れると、左耳のすぐ近くで、アレイさんのバリトンの声が響いた。

「死ぬなよ。帰って来い……こそガキ」

くすぐったいくらいに近くで囁かれた。

その時、微かに唇が左側の頬に触れた気がした。

そのまましばらくそうしてアレイさんの腕の中に納まっていた。

なんだか大きな腕で守られているような気がしてすごく落ち着いた。

「だいじょうぶだよ、アレイさん。ちゃんと帰ってくる」

つぶやくと、安心したように、でも名残惜しそうにアレイさんは自分を解放した。

その向こうでねえちゃんは頬をひきつらせていたが何を言うこともなかった。

「その魔方陣の中に入り、悪魔の名を唱えるとよい」

じい様が指したサークルの中に足を踏み入れた。

三角を二つ重ねた中にアガレスさんの象徴の紋様が描かれた魔方陣。

「んじゃ、がんばるよ!」

3人に笑いかけると、アガレスさんのコインを右手でぎゅっと握り締めて叫んだ。

「アガレス!!!」

目の前を、暗黒の霧が覆った。
渦を巻くように現れたそれは、ほんの数秒後に霧散した。

そして、その後目の前に広がった光景は先ほどまでとは全く異なっていた。

「寒い……」

荒涼とした風が吹き抜ける大地には一本の草もない。ごつごつとした岩だけが顔を出す、永遠に続く平坦な地面だった。

赤茶けた土に生命の兆しはない。

握っていたはずのコインはいつしか手の中から消えていた。

「人の子か 久しいな 客人は」

突然のしゃがれた声にはっとして振り返った。

「こんにちは。第2番目のコインの悪魔のアガレス、さん？」

「レメゲトンか」

「はじめまして、ラック・グリフィスです。よろしくお願ひします」

「礼儀正しいな 幼き娘」

荒涼とした大地に不意に浮かんだ老紳士の姿はとても背景とマッチしていると言えなかった。

シルクハットを深くかぶっていて顔はよく見えないが、口元の微笑がとても高貴だった。こげ茶色の外套はよく手入れしてあってパリツとしていた。

「黄金獅子の末裔か グラシャ・ラボラスはどうしている」

「ぐらしゃ？」

首を傾げると、老紳士は唇の端で微笑んだ。

「幼き娘 まだ何も知らぬのだな」

「おれは最初一つだけコインを持ってたんだ。でも、じい様はそれが何のコインか教えてくれなかった……それはグラシャ・ラボラスという悪魔さんのコインなの？」

「ふふ 吾に 問うか 知らぬが故の 無謀さよの」

老紳士はふわりと宙に浮いて自分に近寄ってきた。
相変わらずシルクハットの中身は見えなかった。

「幼き娘 一度魂が練成されておるが 練成前の魂の跡はまだ残っている それはきつかけを求めあがいている 刻まれているものを 感じ取れ」

「？」

「もう一度練成しなおすのだ 先へ進むために 名は魂を表す 捨て置き そして拾い上げよ」

思わず首を傾げてしまった。

「ぜんぜん答えになってないよ。おれはコインが何なのか聞きたいんだ」

そういうと、アガレスさんは唇の端で微笑んだ。

「はじまりの前にあるもの それがそのコインの答えだ」

「はじまりの前？ はじまりは『そこから』ってことなんだから、その前には何も無い。

もうわかんないよ！

下手に質問しないほうがよさそうだ。しかもじい様は何も教えてくれなかったから自由にやることにしよう。回りくどいことなんてできないもんね。

「答えてくれてありがとう、アガレスさん。でもおれにはちょっと難しいよ。それより、おれはあなたに力を貸してほしいんだ」

「吾と 契約したいと申すのだな」

「そう」

「理由を述べよ」

また変な答えを返されると困るから、慎重に言葉を選ぶ。

「おれを育ててくれた人がいて、その人はレメゲトンなんだけど、おれがその人と一緒にいるためにはおれもレメゲトンにならなくちゃいけない。そのために、アガレスさんの力を貸してほしいんだ」
そう言うと、アガレスさんは楽しそうに微笑んだ。

「力そのものを欲する訳ではないのか 幼き娘 ならば なぜ吾を選んだ」

「王様がおれに合うコインを選んでくれた。それがアガレスさんだつたんだ」

「王を信頼しているのか？」

「ねえちゃんが信頼してるならおれもする」

「それが育て親か 幼き娘の望みは その者と共にあることか」

「そうだよ。それ以外は何もいらぬ。ねえちゃんと一緒にいることだけが俺の望みだ」

「幼き娘のすべては 育て親と共にあるのだな」

「おれの世界を創ってくれたのはねえちゃんだよ」

「その育て親は お前と同じ金の瞳を持つのか」

「？」

自分の瞳は漆黒だ。不本意にもアレイさんのマントと同じ闇色。

「おれの目は黒いよ」

そう言うと、アガレスさんはそれを無視した。

「育て親は 金の瞳か」

「そう。ねえちゃんの目はたまに王様みたいに輝くよ。そんな時のねえちゃんは少し厳しいけど、凜としてかつこいいんだ」

「帝王の瞳」

「うん、そうだね」

「二つの太陽は 惹かれあい いつしか 互いを 滅ぼしあうだろう」

「え？」

思わず間抜けな声が出たけれど、アガレスさんはふわりと浮かび上がって自分と距離をとった。

すつと右手を上げると、どこから現れたのか一羽の大きな鷹がその手に舞い降りてきた。立派な体躯の堂々とした鷹だ。金色の瞳がとても印象的だった。

「では 問おう」

アガレスさんは左手でシルクハットをぐい、と深くかぶりなおした。

「吾の瞳の色を当ててみよ」

「！」

難しいこと聞くなあ。適当にあてずっぽう言ったらいいんだろうか。

でもねえちゃんは、ちゃんと話を聞いてきちんと答えなさい、と言った。きつともっと考えたほうがいい。

今話の中で出てきたのは金色と、黒。

金色は王様の瞳。今降りてきた鷹の瞳も金色だ。

だとすると金色なのかなあ？でも、実際見たわけじゃないしなあ。「わかんないよ、帽子とつてよ」

眉を寄せると、アガレスは半分笑っているような口調で答えた。

「それはできぬ」

「ひどいや、ずっと隠してたのに分かるわけないよ」
唇を尖らせる。

他に何か手がかりはなかったか？ねえちゃんだったらこんな時どんな風に考えるだろう？

「降参か 幼き娘」

その言葉に、少し引つかかるところがあった。

アレイさんにガキって言われたときのよういらいらはしなかったけれど、その言葉は少し不自然だった。

礼儀正しいな、と言った。

もしかして。

「おれはもう20歳くらいだよ。ねえちゃんがいつも言ってる」
「……」

「見た目だけなら幼いっていう年じゃないらしいんだ。それと、ずっとずっと昔の天文学者のゲーティア・グリフィスさんは金色の瞳だったらしいね。おれはそのヒトの子孫らしいって言われたけど、おれの瞳の色は残念ながら黒いんだ」

「……ふふ」

アガレスさんはおかしそうに笑った。

「アガレスさん、きつとあなたは……眼が見えないんだね。」
まっすぐにアガレスさんを見つめた。

「だからきつと、アガレスさんの瞳の色はない。それがおれの答えだ。」

にこりと笑ってそう言うのと、右手から鷹が飛び立った。

「名前」

シルクハットをとったアガレスさんの目は、横一文字に切られたようにつぶされていた。

「！」

「少々 喋りすぎたか 久しい客だったもので 調子にのった」

「……痛くないの？」

そう聞くと、アガレスさんは少しの間口をつぐみ、幾ばくかの沈黙の後に微かにしゃがれた声でぽつりと告げた。

「古い傷だ」

鷹はもう一度舞い降りてきて、アガレスさんの肩に止まった。

「幼き娘 穢れなき魂を 育ててきたのだな」

その声は先ほどより少しだけ優しい響きを含んでいた。

「アガレスさんには、おれが小さく見えるの？」

しまった、質問してしまった！

と思っただが、意外にもアガレスさんは分かりやすく返答してくれた。

「吾は視力を失ってから 姿でなく魂を見ている 幼き娘は金の瞳の3つほどの幼女に見える」

「……おれ3年前にねえちゃんに拾われたから」

「育て親が 世界のすべてなのだな」

「そうだよ。おれ、ねえちゃんがない世界なんて考えられない」

「人の心に永遠はない だがそれ故 願う力は強くなる いつかもう一つの願いを見つけるまでは」

「？」

「だが きっかけは もう見つかっているようだ 時間の問題だろう」

「何が？」

「芽生えるまでには まだかかる」

「アガレスさん、言っていることが難しいよ」

「世は曖昧さにあふれている」

「うん、でも、それは……そうかもしれないね」

嘘と曖昧さと真実と秘め事と。

ねえちゃんは絶対に言ってはくれないだろう。なぜ自分との決別を決めたのかを。あの悲しい表情の理由を。

「育て親は 幼き娘を籠に閉じ いつしか育ったことを知り 空へ放つ 幼き娘を思うが故」

「迷惑なのかな？ おれはねえちゃんといたいのに」

「身を切る思いは どちらも同じ 恨むでない 幼き娘」

「それでも寂しいよ」

「代わりに 吾が 守護しよう」

「……ありがとう、アガレスさん。優しいんだね」

にこりと笑いかけると、アガレスさんは唇の端で微笑んだ。

「血を少しもらう 吾らは 血で人を識別する」

「いいよ。ちよっと待ってね」

と、思ったが左腕が動かないんだった。

少し躊躇っていると、アガレスさんの肩に止まった鷹がこちらへ飛んできた。

思わず右手を鷹に向かって伸ばした。

「痛っ……」

鷹の爪がかすって右手の甲にうつすらと赤い筋が走った。

ふわりと老紳士がこちらに飛んでくる。

「血の 契約を」

自分の右手をとって、甲に刻まれた傷に軽く唇で触れた。

その瞬間に、目の前にコインが降ってきた。アガレスさんの紋様が描かれたそのコインは目の前の空間でぴたりと停止した。

アガレスさんが右手を離したので、空中のコインをしっかりと掴んだ。

「必要とあらば 吾の名を呼べ すぐに 駆けつけよう」

「ありがとうございます」

「困難を 恐るるな 心優しき少女」

目の前を黒い霧が包む。

ここへ来た時と同じだ。

霧が散したとき目の前に広がっていたのは、神殿の地下にある魔方阵だらけの部屋だった。

祈るようなポーズでひざをついたねえちゃんと、眠るように壁にもたれかかっているアレイさん、それにじい様は杖をついたまま、それぞれ出迎えてくれた。

「ラック！」

「おお！」

「ただいま！」

にこつと笑うと、ねえちゃんはこちらに向かって駆けてきた。

「よかった……！」

躊躇いもせずいきつく抱きしめてくれた。

ねえちゃんの髪からは甘い香りがした。

「えらく早いな」

「これまでの歴史の中で最短やも知れん。実に恐ろしき少女よ」

じい様とアレイさんもこちらに来た。

「アガレスはなんとおっしゃった？」

「困ったら呼んでいって。コインも、ちゃんと。ほら！」

右手の中に握り締めたコイン。心なしか今までよりも熱を持っている気がした。

「じい様より少し若い感じの紳士で、シルクハットをかぶってたよ。すごく優しいヒトだった。でも、話が難しくて半分も分からなかったよ」

「……それでよく契約できたもんだ」

「この子の心は真つ白だもの。きつと地震の悪魔アガレスもこの子から何かを感じ取ったのよ」

「たったの半日で帰ってきやがって」

「え？ 半日？ 半日もかかったの？」

アガレスさんと話していたのはせいぜい5分か10分ほどだったと思っただけだ。

「向こうとこちらでは時間の流れが違うのよ」

「向こうって？」

「悪魔たちがすむ世界。俗称では地獄と呼ばれる場所。私たちは普段向こう、彼らは魔界と呼ぶわ」

「じゃあ、ねえちゃんたちは何日後に帰ってくるか分からないおれをずっとここで待つてくれてたの？」

ねえちゃんは困ったように微笑んだ。

「だって心配だったんですもの」

「ありがとう！」

「さあ、おなかすいたでしょう。ケーキも用意しなくてはいけないわ」

「やった！」

ねえちゃんは細い鎖を取り出して、アガレスさんのコインを自分の右手首に固定した。

「ねえちゃん。ねえちゃんの時はどのくらいかかったの？」

「私がクローセルと契約したときは、大体1週間くらいかしら。契約はすぐ済んだのだけれど、なかなかクローセルが帰そうとしなくて」

その時のことを思い出したのか、ねえちゃんは大きくため息をついた。

「1週間？」

「アレイのときは、もっとかかったわよ。マルコシアスと契約に行つて、帰ってきたのは3カ月後だったもの」

「3ヶ月！」

「剣の稽古をつけられていたんだ」

「すっごおい」

「帰ってきた時はぼろぼろだったわ」

アレイさんはむつつりと黙り込んでしまった。

「でも、ちゃんと帰ってきた。それだけですばらしいわ」

「帰ってこないヒトもいるの？」

「……」

ねえちゃんの金の瞳が揺らいだ。

アレイさんも目を背けたように見えた。

じい様が代わりに答えてくれた。

「帰って来ぬ者のほうが多い。大体9割は契約しようとした悪魔に囚われ、一生を向こうで終える。もしくは……命を落とす者も多いのだ」

「！」

「ゼデキヤ王はレメゲトンの称号を与えることを躊躇なさるの。本当に王の信頼を得られない限り悪魔との契約まで漕ぎ着けないわ。ゼデキヤ王が即位されてから、悪魔との契約で命を落とすものは出ていない。それはひとえに王の判断力と人を見る力が優れているおかげよ」

「帰って来なかつたり命を落としたりしたのは昔の話だ。近年では墮天以外のコインは使わないことになっている。扱いはいいコインをわざわざ起こすこともあるまい」

『だてん』という言葉に聞き覚えがあった。

「だてん……クローセルさんも同じことを言ってたよ。だてんだから翼があるって。だてんって、なあに？」

「天使から悪魔になった人たちを、墮天と呼ぶのよ」

「クローセルさんも、マルコシアスさんも、アガレスさんも？」

「そうよ。他にもたくさんいるわ」

「フラウロスさんは？」

その瞬間にねえちゃんの表情が強張った。

「フラウロスは違うの。彼は最初から悪魔よ。オレンジの大きな豹の姿で、恐ろしい地獄の業火を操ると言われているわ。焼き殺されたレメゲトンも数知れない。アガレスとは比べ物にならないほど苦労するはずよ」

「だから今回のゼデキヤ王の考えが理解できんといっているんだ」
「怖い悪魔さんなんだ」

想像もつかなかった。自分の知っている悪魔さんはみんな優しくて素敵なヒトばかりだから。

「それだけゼデキヤ王はラックの能力をかっていているということね。まあ、でもそれはまだ先の話よ。とりあえずはアガレスと契約した事でレメゲトンとしての地位を確立できるわ。フラウロスと契約するのは何年も先でいいの」

「そういうものなんだー」

「当たり前だ、このくそガキ」

「ガキって言うな！」

アガレスさんには魂が3歳くらいって言われたけど。

「そう何度も命を賭けられてたまるか」

吐き捨てるようにアレイさんは言った。

アガレスさんに会いに行く直前のことを思い出す。

「そうだ、アレイさんは『死ぬな』って言ったんだ。『帰って来い』って言ったんだ。もしかして、とても心配してくれていたんだろっか。」

「そうなのかなあ。」

じつとアレイさんの紫の瞳を見つめたけれど、何を考えてるかはぜんぜん分からなかった。

「何を見ている」

「もしかして、心配してくれた？」

「していない」

「何言ってるの、もちろんしてたわよ。たとえばあなたが3ヶ月帰って来なくてもアレイはずっとこの部屋に居たでしようね」

アレイさんはまたそっぽを向いてしまった。

「でも、本当よ。今回は半日で戻れたけれど、次もそうだという保証はない。むしろ今回が歴史的に見ても稀有なくらいに簡単だったのよ」

「ねえちゃん、真剣な表情で諭した。」

「本当によかったわ、無事に帰ってきて」

「うん、分かった。悪魔さんと会うときは、すごく気をつけるよ」
真摯な顔で頷くと、安心したように微笑み返してくれた。

「じゃあ、戻りましょう。少し遅くなっただけけど昼食よ」

「はい」

じい様の杖でもう一度地上に戻った。

太陽は天辺を少し過ぎたところだった。神殿を出て少し歩いたところにある別館に入った。そこは普段お客様が謁見まで待ったり何日も泊まつたりする建物らしい。

昼食のために席につくと、目の前の大きな窓からゼデキヤ王と昨日謁見した建物の全景が見渡せた。

おなががすいていたので昼食を黙々と口に運んで 右手だけの食事にもかなり慣れてきた すべて食べ終わってからふう、と一息ついた。

「まんぷく！」

「よかったわね」

最後に出てきた小さなチョコレートケーキまで全部平らげてから、椅子の背もたれに寄りかかった。

「今日は他にすることないの？」

「そうよ。それどころかこれから1ヶ月間何もなしわ。普通悪魔との契約には半日どころじゃなく時間がかかるもの、ゼデキヤ王から指し当たってそれだけの期間が与えられているのよ」

「あれ？ そしたらおれはその間どうしたらいいんだ？」

「アガレスと話さない、いろんなことを。彼は博識よ。彼の言葉は難しいかもしれないけれども勉強になるはずだわ」

「わかった」

「あとは、アレイとマルコシアスに稽古をつけてもらいなさい。あなたは、左手が使えなくても戦える方法を学ばなくてはいけないわ」
「……わかった」

左手がもう一生動かないことは分かっていた。銀髪の人から受

けた傷で自分は左手を完全に失ったのだ。

「明日の午前中にはお医者さんが抜糸してくれるそうよ。午後にはもう包帯なしで動けるでしょう。そうしたら、まずは買い物にでも行ってきなさい。市場に行きたいんでしょう？」

「行っていいの？」

「今日がんばったご褒美よ。アレイ、一緒について行ってあげて」

「何で俺が」

「一人で町に出すわけには行かないでしょう」

「ねえちゃんが行かないの？」

「私は用事があるのよ、ごめんなさいね」

ねえちゃんは残念そうに言った。

寂しい。

そんな顔でねえちゃんを見上げると、ねえちゃんは頭をなでてくれた。

「大丈夫よ、アレイが連れて行ってってくれるから」

「うん、わかった！」

「ガキのお守りなんか真つ平だ」

アレイさんはそっぽを向いてしまった。

「あら、何を言ってるのかしら。一日でもラックと遊びに行けるのを許した私に感謝なさい」

「っ！」

アレイさんはねえちゃんを睨みつけた。

「だいたい相手がラックじゃなければあの時とっくに気づいてるわよ？これ以上隠す理由なんてないと思うけれど？」

「若造が……」

じい様はふん、と鼻を鳴らした。

「くそっ……」

アレイさんはまたそっぽを向いてしまった。

心なしが頬が色づいている気がする。いつも無表情なアレイさんにはとても珍しいことだ。

「そんなに自分と買い物行くのが嫌なんだろうか。
アレイさんおれのこと嫌いなんだろ！」

きゅつと眉を寄せてそう言うと、一瞬置いた後にねえちゃんがかしそうに笑った。

じい様も笑いをこらえているように見えた。

「報われないわねえ、アレイ」

「……」

アレイさんは答えてくれなかった。

心配してくれたり嫌がったり、ガキって言ったりもう分かんないよ！

「ラックはアレイ好きなの？」

ねえちゃんがいたずら好きの猫みたいな金の瞳で聞いてくる。

そしてアレイさんがひどく眼を吊り上げてねえちゃんを睨んだ。

自分は少しだけ首を傾げる。うーん、そうだなあ。

「んとね、声が好き。いろんな事教えてくれんのも好き。でも、口

が悪いところは嫌い！」

その瞬間にねえちゃんは大笑した。

何で？

ねえちゃんは笑いをこらえながらさらに聞いた。

「他には？」

「えつと、何か考えてるみたいな時の顔は好きだけど、きゅつて眉間にしわがよつてるときはあんまり好きじゃない。あ、でもねでもね」

「何？」

「普段アレイさんを見るのは好き！アレイさん、すごく綺麗だもん。ミメウルワシイってアイリスとリコリスも言ってたよ！」

アレイさんはがたりと席を立てて部屋を出て行ってしまった。

しまった。また嫌われたかな。でも寝めたのに何でだろ？

「……この子、意外と面白いのかしら？」

ねえちゃんが微妙な表情を浮かべた。

「めんくいつて?」

「綺麗なものが好きって事よ」

「普通そうじゃないの? ねえちゃんも好きだし、クローセルさんもマルコシアスさんも好きだ」

気まぐれ猫みたいな金の瞳のねえちゃん。金髪碧眼のクローセルさん。褐色の肌にオッドアイの戦士マルコシアスさん。それからなにより、誰よりもきれいな……路地裏で見つけた銀髪のヒト。それにそっくりなもう一人の銀髪のヒト。

ああ、どうしてこんなに気になるんだろう。群青の深い瞳を思い出しただけで胸が騒ぐ。

少し視線を落として、口をつぐんだ。

銀髪のヒトの事を思い出したのが伝わったのか、場の空気が重くなった。

ねえちゃんは少し声のトーンを落として言った。

「会いたいつて言ってたわね」

「うん」

「今でもそう?」

「変わってないよ」

「会ってどうするの?」

「分かんない。でも、あのヒトはきつとおれの過去を知ってるよ。それを聞いてみたい。それよりなにより……すごく、会いたい」

声が聞きたい。姿を見たい。あの銀の髪に触れたい。

どうしてこんなにも惹かれるのか全く分からない。でも、会いたくて仕方がない。

「仕方がない子ね」

ねえちゃんはまた悲しそうに微笑むと、じい様に眼を向けた。

「少しくらいなら大丈夫だろう。行ってくるといい。最後の別れだ」

「ありがとうございます、老師」

ねえちゃんは深く頭を下げると席を立った。

「さあ、会いに行くわよ、ラック」

「……うん。」

唐突に会えるとなるとすぐどきどきした。

お客様用の建物を出て、神殿を通り過ぎて、王様の居る建物を横目に見送ってついた先は……とても、大きくて薄暗い塔の前だった。小さな入り口が一つついているだけで黒っぽい石造りの塔は本日よりずっと大きく見えた。アレイさんの闇色マントを見たときを同じようにとっても怖かった。

「ここにいるの？」

聞いたけれどねえちゃんは答えてくれなかった。

衛兵さんが二人居て、ねえちゃんが短く何か言つと中に通してくれた。

入るとすぐに地下へ下りる階段があつた。その先は真っ暗で、そこには何があるのか見当もつかなかった。

小さなランプを灯してねえちゃんと二人で下りた。

足元も見えない闇の中、自分の心臓の音と丈夫なブーツの靴音が耳元で鳴り響いていた。

「気をつけなさい。足元が暗いわ」

「うん」

闇には少しずつ眼が慣れていって、足元が見えた。

見慣れたブーツとそこから伸びる脚。もう3年間ずっと見てきたものだ。

「着いたわ」

ねえちゃんの言葉に顔を上げる。

そこには真っ暗に伸びる長い通路があつた。その両側の壁には太い鉄格子。

まるで絵本の世界から抜け出てきたような牢獄の光景にまた心拍数が上昇した。

「彼は……彼らは敵なの。グリモワール国にとって最大の敵対国セフィロトに仕える神官よ」

「敵？」

「そう。もしかするともうすぐグリモワールと戦争を起こすかもしれない隣国セフィロトにも、レメゲトンと同じ役職がある。それを神官、セフィラと呼ぶわ」

セフィロト国。戦争。セフィラ。

一つ一つの単語がまるで理解できない。頭の中を素通りしていった。

「一つだけ違うのは私たちが悪魔と契約したのに対して彼らが天使と契約を結んだことよ」

カツン カツン

ねえちゃんの靴音が高く響く。

左右の檻に眼もくれず、ねえちゃんは最奥にぼんやりと浮かび上がる最も頑丈な檻に向かっていった。

「彼らはおそらくグリモワール王国の内情視察に放たれたセフィラだったのでしょう。カトランジエの街でアレイに遭遇してその場はかなり暴れたらしいわ」

「それは……もしかして、あの日の前夜？」

「そうよ」

あちこち破損した街の景色と大きく崩れた路地裏の壁、それから怪我をした銀髪のヒト。

あの朝街で見た光景が目の前に浮かんだ。

「次の朝彼は偶然にもラック、あなたと出くわしてしまった。そしてロストコインを持ったあなたをアレイの仲間のレメゲトンと勘違いした彼はあなたを連れ去り、街から離れた教会で監禁したの。きつともう一人の行方を知っていると思ったのね」

「もしかして、おれが殺されそうになった時にねえちゃんが助けてくれたの？」

「正確にはアレイよ。怪我をした方のセフィラを見つけて追って行った先にあなたがいたらしいの」

カツン カツン

靴音が不快なくらい耳に障った。

「一つだけ分からないことがあるとしたら……なぜ彼が最初の晩にあなたを殺さず放置したのかってことくらいね。それは聞いてみる価値があると思うわ」

カツッ

靴音が停止した。

檻の前には二人の衛兵が距離を置いて控えていた。手も入らないような隙間で太い鉄格子が床から天井まではめてあり、その向こうに薄ぼんやりと空間が広がっている。

「彼ら本人にね」

見つめた先には暗闇でも燐光を放つ青みがあった銀の髪。

二人とも壁にもたれるように顔をうずめて座っていたが、靴音に気づいたのかふと顔を上げた。

時を置いて見る群青の瞳に心臓が跳ね上がった。

「貴様！」

眼を吊り上げて飛び掛らんばかりの勢いで跳ね上がったのは最初に見つけた、深紅のオーラを持つヒト。

少し遅れて半眼のヒトも顔をあげた。

「あの時のレメゲトン……貴様だけは生かしておかん！」

「待つてよ！ 聞きたいことがあるんだ！」

檻に近くまで駆け寄った。

殺気がびりびりしていてもそれ以上近寄れなかった。

「おまえたちいったい誰なんだ！ どうしておれを殺そうとしたんだ！」

「貴様敵国の分際でそんな事を尋ねるか！ 誰が答えるか！」

武器のブレイドは没収されているようだったが、素手でも自分を殺しかねない勢いだ。

「でも、おかしいわね。セフィラがそんな風に感情を表に出すこともミスをする事も、一人のレメゲトンに執着することも……そんなことは普通ありえないはずよ。」

ねえちゃんの凜とした言葉が分断した。

「知るか！ なぜか貴様は殺さねばならんと思ったただけだ！」

ああ、そうか。

瞬間的に理解した。

このヒトも別に理由はないんだ。ただ、自分を殺したいだけ。訳が分からないまま自分を狙っていたんだ。

なんでだろう。

いったいどうして自分はこれほどこのヒトに会いたくて、このヒトはこれほど自分を殺したがるのだろう。
心はどうにも動かない。

どうしようもない感情が胸の中をぐるぐる渦巻いた。気持ちが悪くなるくらいに締め付けられて、その心は眼からしずくとなって零れ落ちた。

「どうして……？」

その瞬間に、何か自分ではないモノが自分を支配した。
額が焼けるように熱くなった。

「ミカエル」

そして、自分の喉から出た声は自分のものではなかった。
深く悲しいテノールの響き。

ねえちゃんが驚いたように自分を見たのも、檻の向こうに一瞬まばゆい光が溢れたのもなんとなく見えていた。

でも、次に気がついた時、自分はねえちゃんの背の後ろに匿われていて、檻を守っていた衛兵さんは二人とも地面に突っ伏していた。

「これでやつと殺せるな……レメゲトン」

「そんなことさせないわ」

声が震えている。

ねえちゃんの背中以外何も見えないけれど、緊張は痛いほどに伝わってきた。

低くてよく通る声が聞こえる。

「俺がティファレットだと分かっているながらこの程度の拘束しかしなかった貴様らの間抜けさを呪え」

ティファレット。

また知らない語句が増えていく。

「ラックは殺させない。私を守るわ」

銀髪のヒトがいったいどうしたと言っただろう。

ねえちゃんの心臓の音がする。

「クローセル！」

叫びとともに魔方阵が発動したけれど、クローセルさんは現れなかった。

「無駄だ。第49番目の悪魔クローセルは墮天だろう？ 出来損ないの墮天使がミカエルの前で姿を保てると思うなよ」

だてん。墮天って言う言葉は知っている。もとは天使さんだった悪魔のことだ。

ミカエルって言う名前に聞き覚えはないはずなのに、とてもよく知っている気がした。それより何より先ほど自分はなぜその聞き覚えのない名前を呼んだのだろう……？

「逃げなさい、ラック。すぐにアレイや老師様にこのことを伝えるの。わかった？」

小さな声でねえちゃんは呟いた。

声が出ない。

どうして。返事しなきゃ。いつもみたいに、『分かった』って……。

一瞬躊躇した。

銀髪のヒトにはその一瞬で十分だったみたいだ。

「どけ、レメゲトン」

ふいにねえちゃんの背中が消える。

吹っ飛ばされたねえちゃんは反対側の壁に激突して、動かなくなつた。

「ねえちゃん！」

「貴様は殺す！」

「！」

目の前にいたのは、檻を完全に粉碎して進み出た荘厳な天の御使の姿。

クローセルさんに似ているけれど、輝きが半端じゃなく違う。背には6枚の翼が輝き、銀の額飾り以上に頭上の金冠が煌いている。流れるように落ちたゆるく波打つ銀の髪が女性とも男性ともつかぬ

整った顔を彩っていた。

その天使さんは初めて出会った時の銀髪のヒトと同じような純白のローブに身を包み、その手には純銀の剣を携えていた。

訳の分からない感情が全身を支配する。

眼を大きく見開いて銀髪のヒトの頭上に浮かぶ天使の姿を見上げた。

銀髪のヒトも全くどちらか分からなかった。完全に見分ける自信があつたのに、どちらとも違う。赤でも青でもない、目の前の天使さんと同じ銀色のオーラを放っていた。

心臓がこの上なくらいに速く脈打っている。

「ミカエル」

またも自分ではない声が自分の喉から響いた。

頭がおかしくなりそうな感情を荒い呼吸で押さえつけようとしたが……

薄暗い空間に浮かぶ銀髪のヒト　以前と同じだ。すさまじい痛みと恐怖、胃が反り返るような嫌悪感が全身を貫いた。

「うあああああああ！！」

SECT・24 グラシャ・ラボラス

目の前が真っ赤に染まる。血の匂いがする。

痛い 苦しい 辛い

「たすけ……て……」

床に這い蹲って苦しみから逃れようともがいた。

目の前を何かが通り過ぎる。

暗闇に光るブレイド、むせ返るような血の匂い、全身を襲う痛み、浮かび上がった銀髪のヒトとその背にあるのは 翼。

「いやだあああ！」

何だこれ……何なんだよ！

まぶたの裏をさまざまな光景がフラッシュバックする。流れ落ちる血、真っ赤に染まった自分の手、銀髪の天使、冷たい群青の瞳……気が遠くなりそうな衝撃が駆け巡っていった。

が、その時、微かに残る理性の中で、誰かが呼ぶ声を聞いた。

「起きろ、くそガキ！」

「……あ……」

フラッシュバックは一瞬で消え去った。

目の前にはまた壊された頑丈な檻と闇の空間が戻ってきた。

「貴様はまた邪魔をするのか」

忌々しげにつぶやかれた低くてよく通る声。

「はあ、はあ、はあ……」

荒い息で何とか上体を起こす。座り込む力は残っていない。後ろの壁にもたれかかった。

目の前には闇色マントが立ちはだかっていた。

アレイさんだ。

もう嫌われたかと思ったのに、どうしていつも助けてくれるんだろ。

銀髪のヒトが右手をすつと宙に掲げると、銀の光でできたブレイ

ドがその先に現れた。

「マルコシアスの加護がない貴様など敵ではない！」

闇色のマントが目の前で翻る。

銀のブレイドとアレイさんの剣が何度も交差しては離れた。金属音が体の震えを誘発する。

でも、見ていれば分かる。

頭上に天使の加護を抱いた銀髪のヒトは明らかに押ししている。マルコシアスさんがいれば……

「アガレスさん……助けて……」

魔方阵は発動したけれど、アガレスさんは姿を現さなかった。

そうだ。アガレスさんは墮天だと聞いたばかりじゃないか。

フラウロスさんとはまだ契約していない。

アレイさんが少しずつ押されている。決着がつくのは時間の問題だろう。

いやだ。ねえちゃんもアレイさんもいなくなっちゃいやだ。

でもいっただいどうしたらいいんだろう。

「死ね！」

「ぐあっ！」

闇色のマントが視界から消えた。

「アレイ、さん……？」

ぼやける視界の中で姿を探すけれど、遠くに飛ばされたのか見当たらない。

「今度こそ貴様一人だ」

群青の瞳が自分を貫いた。

その頭上に輝く天使の瞳も同じ群青だった。

ミカエル。どうして。なぜ……こうなってしまったんだ？

「貴様だけは殺す」

銀髪のヒトがこちらに光のブレイドを向ける。

天使さんはどこか悲しそうな瞳で自分を見下ろした。

どこか憐憫を含んだそのまなざしに、また別の声が自分の喉から

こぼれる。

「争うつもりはなかったんだ ミカエル」

声が出ない。自分では体を制御できないみたいだ。

群青の瞳の6枚翼の天使は悲しそうにこちらを見て男性とも女性ともつかぬ美しい声で答えた。

「今更何をおっしゃるのですか 兄さん」

「今なお 戦いを望んではないのだ」

やめてくれ！おれを支配しないで！

額が焼けるように熱い。

自分が銀髪のヒトに会いたいと願った気持ちはいつたいどこから来たんだろう。銀髪のヒトが自分を殺そうとしたエネルギーは一体どこにあっただろう。

もしかすると、銀髪のヒトに会いたいと思ったのは自分じゃなくてこの声の主なんじゃないか。そして、会いたいヒトはきつと銀髪のヒトじゃなくてこの銀の力を持つ6枚翼の天使だったんじゃないのか。

体に全く力が入らない。

そうだとしたら、このヒトは誰？さつきから自分の内側でこの天使に呼びかけるこのヒトは……？

が、今考えるのはそうじゃない、と意識を切り替える。

そう、願うことはいつだって一つにしなくちゃいけないんだ。アレイさんが言っていた。

だから唯一つだけを願った。

「助けて……」

ねえちゃんとアレイさんだけでいい、おれはどうなってもいいから。このヒトに支配されたっていいんだ。ここで殺されたってかまわないんだ。本当ならあの森の中の教会で一度失くしたはずの命だから。

でも、誰か助けて。

お願いだ。

誰でもいいんだ。

おれを守ろうとしてくれたこの二人だけは助けてくれ。
無常にも銀のブレイドは自分にまっすぐ向けられていた。

「死ね、レメゲトン！」

誰か……！

その時右手に何か当たった。

アガレスさんはこれを『はじまりの前にあるもの』と言った。

じい様は『知らなくていい』と言った。ねえちゃんもアレイさん
も教えてくれなかった。

銀髪のヒトは『破壊する』と言った。

3年前からずっと一緒だったコイン。最初から微かに熱を帯びて
いたのが自分の勘違いでないとしたら。

もし自分が一記憶を失くす前すでに契約していた《……………
……………》としたら。

お願いだ。

助けてくれ。

誰かの支配に逆らって右手でペンダントのコインを強く握り締め
た。

「グラシヤ・ラボラス……！」

その瞬間、空間が丸ごと闇に飲み込まれた

闇の空間の中で、銀髪のヒトとその守護天使だけが光を帯びていた。

「はあ、はあ……」

荒い息を整えて立ち上がる。

脚に力が入らないのを無理やり奮い立たせた。

「ありがとう」

「久しぶりだね ルーク」

「ルーク？ それはおれの名前なのか？」

「何ヲ言ッてルンダイ？ 君ハそうナ乗ッたジャないか」

目の前に下りてきたのは、漆黒の翼を持つ大きな狼だった。

漆黒の毛並みに真ッ赤な炎妖玉ガイネットの瞳が嵌め込まれている。時折除

く犬歯はハンターというよりは殺戮者の刃のように感じられた。

「3年前に全部の記憶を失くしたんだ。だから、本当は契約したことも覚えてなかった」

そう言つと、狼の姿の悪魔はぎろりと自分を睨んだ。

その瞬間心臓が凍りそうな恐怖が襲った。炎妖玉ガイネットの瞳は燃えるような色なのに感情は全く映し出されていなかった。

きつと逆らつたら即殺される。動物的勘でそう悟った。

「まさか 僕の名前モ 忘れたんじゃないダロウね」

怖いという感情を押さえ込んで、とにかく聞いてみる。

「……ごめん、グラシャ・ラボラスじゃないの？」

「違ッヨ サイ低だね」

まるで幼い子供のような声でたどたどしく言葉をつむいでいるのは、どうやら喋るときに犬歯が引つかかるかららしい。

怒ったように鼻を鳴らして、偉そうな口調で付け加えた。

「仕方ナイな もうイチド 契約するカイ？」

「お願いします」

「でも 僕 傷ついタンだけど 名マエを忘レルなんて」

「ごめんなさい！すぐく謝るよ。一生懸命思い出すよ。だから……」

「何カ クレル？」

口元の犬歯を大きく覗かせながら、悪魔は微笑んだ。

「何でもあげる。何が欲しい？」

「魂」

狼はきらりと瞳を光らせた。

どきりとした。

「と 思ツタけど ルーク 君ハ お気に入りだから」

「おれがあげられるものなら何でもあげるよ！ だから、お願い。

ねえちゃんとアレイさんを助けて！」

「ヤレやれ 君は 変わってナイな その自己犠セイの精神ガ 好きダヨ そんなコトシていて いつか 身を滅ボス時が来ルト 思うと 楽シミで 仕カタナイね」

そう言つて楽しそうに笑つた悪魔は、じつと自分の左腕を見つめた。

「ソの左ウデ 死ンデルね？」

「……そうだよ。もう動かない」

悪魔の顔が近づいた。

熱い息が感じられて背筋が凍つた。

「んジャあ そのウデ 頂戴」

「……いいよ。それでねえちゃんたちを助けてくれるなら」

「交シヨウ成立ダ」

グラシャ・ラボラスという悪魔は黒い霧に姿を変えると、自分の左腕にまとわりついた。

そして、真つ黒な刃を持つ剣が自分の左手に出現した。でも、左手は自分の意思どおりに動く気配はなかった。

それでも左手はしっかりと剣を握つて、それをぶんと空を切つて振りかざした。

「手だけジャ やり辛イナ 体を借リルよ」

声が響いて、黒い霧は全身を包む。

同時に視覚以外はグラシャ・ラボラスに明け渡されたようだ。

目の前の荘厳で綺羅らかな天使の姿に全く怯むこともなくグラシヤ・ラボラスは剣を構えた。

背に荘厳な天使を控えた銀髪のヒトは、忌々しげに言葉を吐いた。
「まさかすでに契約していたとは……空間に入ってしまったのは誤算だ。それよりもミカエル、このレメゲトンと知り合いなのか？」

「今は言えぬ。ただ、倒さねばならぬ相手だと言っておく」
群青の瞳の天使は悲しみを映した瞳でこちらを見ていた。

「悠長ナ事 言ッテいいの力 ミカエル 僕を倒シタいのナラ
メタトロシ か サンだるフォンクライ 連れテ来い」
知らない名前が錯誤している。

きつと自分はもうこの戦いの中には介入できない。

お願い、グラシヤ・ラボラス。ねえちゃんたちを守って！

「違うヨ 僕の名マエ……」

そんな声と共に、頭の片隅に微かな声が響いた。

頭の片隅に浮かんだこの言葉はこの悪魔さんの名前なんだろうか。確かに聞き覚えのある名前だ。心のどこかでこの悪魔さんのことを覚えていたのだろうか。

「名を呼んデ そシタラ 僕ハ マケナイ」

とても美しい名前だった。

声は出ないから心の中でそつとその悪魔さんの名前を呼んだ。

カークリノラス

「ありがと」

その瞬間に目の前に銀髪のヒトが迫っていた。

自分が……自分の体を使ってカークリノラスが飛び掛ったのだ。すぐく近くで金属音がする。視覚だけでなく五感全体は自分にあるようだ。

跳ね上げた銀のブレイドの下から腹を狙って黒い剣を突き出せば、銀髪のヒトは間一髪かわして反撃の拳を繰り出してくる。

速度が半端でないから間合いの取り方も普通とぜんぜん違う。剣の間合いから拳の間合いに入るのが一瞬すぎて自分には判別できない。

二人とも必殺の間合いを取りあぐねているように見えた。一瞬でも隙を見せればどちらかが倒れてどちらかが生き残ることになるだろう。

しかも軽く放っているはずの攻撃が軽くない。一撃一撃がものすごい重さだ。

五感が残っている自分には、攻撃を受ける剣を持つ腕や間髪一髪かわす足元にすさまじい負荷がかかっているのが分かる。

そして自分の体が限界に近づいていることも。

カークリノラーズはいったん距離を置いた。

「器の差だな。読み誤ったろう」

銀髪のヒトがにやりと笑った。

が、カークリノラーズも同じように悪魔の笑みを浮かべた。

「読みアヤマったのは そっちだ 僕はもともと 剣士じゃない」

手から黒い剣が消えた。

次の瞬間、目の前が赤く染まっていた。

いったい何が起こったのか分からなかった。

へんな味がした。

どうして匂いじゃなく味なんだろうと一瞬だけ思った。

でもそれはすぐに分かった。

大嫌いな鉄の匂いが鼻をついたから。

「僕八 サツ戮と滅びの悪魔 グラシャ・ラボラス 武器は 剣じゃない この牙ダケだ」

ぬるりとした感触が口元を覆った。

気持ち悪いのと恐怖とで背筋が凍った。

カークリノラーズは口の中に入った血をいくらか吐き出したが、鉄の匂いは取れなかった。

「こん……ばかな……」

銀髪のヒトは首から大量の血を流していた。

カークリノラーズが一瞬で懐に飛び込んでその喉元を牙で掻っ切ったのは一目瞭然だった。

「やばい、ミカエル……一旦退くぞ……！」

銀髪のヒトの途切れ途切れの言葉に6枚翼の天使さんは大きく両手を広げた。

「逃がスカ！」

カークリノラーズは追おうとしたが、6枚翼の天使さんの放つまばゆい光に眼を細めているうちに銀髪のヒトと天使さんは忽然と消えていた。

SECT・26 カークリノラーズ

「くソつ まあイイ 次ハ 逃がせない」

口の周りについた血を舌でなめとって、カークリノラーズは満足げに微笑んだ。

あたりの景色はいつしか元の地下牢獄に戻っている。

ねえちゃんとアレイさんが突っ伏しているのを見て、駆け寄りた
いという衝動に駆られた。

けれども体はまだ自分の思い通りに動かない。

「約束ドオリ 左ウデ 貰うヨ」

黒い霧は左腕に収束した。

そこからカークリノラーズの頭がにゅつと突き出した。

「！」

驚いていると、カークリノラーズはそのまま全身を飛び出させた。

改めて見たその姿は、殺戮と滅びの悪魔の異名そのものだった。

闇色の毛並みに映える地獄の業火を閉じ込めた炎妖玉ガイネットが不気味に煌いて、犬歯が飛び出した口には先ほどの血がこびりついている。背の翼はクローセルさんやマルコシアスさんとは違う蝙蝠のような膜の翼だ。

ヒトが見れば思わず震え上がるような姿。左腕をくれ、と言ったのもこの悪魔にとってはかなり妥協したラインなんだろう。

「んジャ いたダキマス」

カークリノラーズは擦り寄るように左腕に頭を添えると、ついと犬歯で持ち上げた。

この後どうなるか分かってたはずなのに目を閉じるのを忘れていた。

カークリノラーズは包帯をそのままにして鋭い歯で噛み砕いた。

「ガギリ」

「！」

銀髪のヒトにブレイドで切られたときは比にならない痛みが貫いた。

「っあああっ！」

我慢しきれずに喉の奥から悲鳴がほとばしる。

目を閉じなかつたためにまともに悪魔の食事を目の当たりにしてしまった。

鋭い歯で砕かれた肉の隙間から血が噴出し、牙を真っ赤に染め上げた。悪魔はその肉の合間から見え隠れする白いものまでがりがりと噛み砕いている。

「ぐっ……あああ……」

骨を砕く音と吹き出る血は目の前で起きている事象が現実であることを告げていた。

痛みで飛びそうな意識を無理やり保った。自分の腕が目の前で砕かれて悪魔の腹に入っていくというのはもう現実味がなさ過ぎて遠い世界の出来事のようにだった。

激痛は臨界点を過ぎた後少しずつひいていき、もう何をやる気力もなく壁に体をもたれかけた。

「美味シイ ルーク 信じラレナイヨ！ 僕 こんな美味シイの初メテだ！」

肘までを完全に平らげたカークリノラーは興奮したように叫んだ。

名残惜しそうにちぎられたひじの辺りをなめていたようだったがそこにはもう何の感覚もなかった。

頭がぼんやりする。

もうだめだ。

出血が多くてまぶたが落ちてきた。

「ねえ……カークリノラー……」

「なあに？」

「名前長いから……ラースって呼んでいい？」

もう自分がよく分からないことをいつているのも分かっていた。

でも、どうしようも自分を制御できなかった。

痛いのか気持ち悪いのか眠いのかもよく分からなくなってきた。

「ルークは マエも 同じ事言ったヨ」

「そう」

もうだめだ。

眼の端でアレイさんが身じろぎした気がしたんだけど。

ねえちゃんの声が微かに聞こえた気がしたんだけど。

「僕ハ 戻るよ ルーク」

「ありがとう…… ラース、助かった……」

微かにラースが微笑んだ気がしたのは、気のせいだったのか知らない。

それからのことはあんまり覚えてない。

ねえちゃんが自分を見て悲鳴を上げて、アレイさんはひどい怪我をしてるにもかかわらず血相を変えて自分を抱えて地下から飛び出した。

じい様とか知らないヒトとかがいっぱい飛び出してきて、運ばれて、口や体中についた血を洗い流されて、気がついたらベッドに寝かされていた。

天蓋つきのベッドで天井は見えないが、ずっと上ばかり見上げていた。

自分を殺そうとした銀髪のヒトと天使さん。自分を支配しようとしたヒト。殺戮と滅びの悪魔グラシャ・ラボラス。

いろいろなことが頭の中をめくっていった。

しばらくして、知らない女のヒトがやってきた。ねえちゃんよりも年上だろう。細かいしわが見え隠れしている。

それでもやさしげなブラウンの瞳とふわふわしたこげ茶の髪はとても印象深かった。

「初めまして、新しいレメゲトン」

「……だあれ？」

「私はこの国のレメゲトンの一人、ベアトリーチェⅡアリギエリです。ファウスト女伯爵やクロウリー伯爵はまだ怪我から回復なさっていないっしやらないので私が参りました」

「二人ともだいじょうぶなの？」

「はい、命に別状はありません」

「よかった」

ほっとため息をついた。それだけ分かればもう心配事は何もない。「少しお尋ねしてよろしいですか？」

「うん、いいよ」

「あなたは、その……コインをお使いになつたのでしょうか」

「そうだよ。殺戮と滅びの悪魔だつて本人が言つてた」

「……それはロストコインの中で最も扱いの難しいとされる滅びのコインです。稀代の天文学者ゲーティアⅡグリフィスが使役して以来誰の召還にも応じませんでした。だから、ヴァイヤー老師もあなたがそのコインを使うことを許さなかつたはずですよ」

「そうだね。でも、おれこの悪魔さんとはずっと昔に契約してたんだ」

契約して、名を交換した。

自分は記憶から無くなつてしまつたがああ悪魔さんはちゃんと助けてくれた。

「銀髪のヒトが天使さんを召還して、ねえちゃんとアレイさんは悪

魔さん呼び出せなくて、おれもアガレスさんに助けを求めたけど無理だった。だから、このコインを使ったんだ」

「何という危険なことを」

「うん、ごめん、ぜんぜん知らなかったんだ。どんなコインなのか、どんな悪魔さんなのか」

怖かった。終始子供のような口調で子供のような声で話してはいたが、その裏に隠された狂気は隠しきれていなかった。

あの真っ赤に燃える瞳も鬨の毛並みも背筋が凍るほど怖かった。

何より、銀髪の一トの喉を噛み切った瞬間の恐怖は拭い去れるものではない。

今思い出してもぞつとした。

全く感知できない速度で必殺の凶器を閃かせる殺戮の悪魔。

「だいじょうぶ、そんな頻繁に使えないよ……左腕もあげちゃったし。」

と言って、左手に感覚を集中させてみて、驚いた。

左腕の感覚があった。

そんなばかな。

銀髪の一トに切られて完全に動かなくなり、レースに砕かれて食べられてしまったのに。

あるはずがない。

「おれの左手……どうなってる？」

「ご自分でご覧ください。」

ゆっくりと左手をシーツの下から引き寄せる。

恐る恐る出した左手は今まで自分が使っていたものと同じに見えた。

「何で左手が戻ってるんだ？」

「が、すぐに気づいた。」

「！」

左手の甲に滅びのコインが埋め込まれている。

その周りだけ血管が浮かび上がって赤黒く変色していた。

手を握ったり開いたりしてみたが痛みはない。ひねったりもしてみたが、動かすのに何の不都合もないようだ。

おそらくラースが食べてしまった左手の代わりに何か不思議な力で付けておいてくれたのだろう。

「ラース、ありがとう。」

ラースにしてみれば何のことはない、次に体を借りる時に左腕がないと不都合だと思っただけのものだろう。

でも、左腕があるのとないのでは自分にとって雲泥の差だ。

完全な左腕を見たら元気がわいてきた。

その感触を確かめるように左腕を支えに起き上がり、ベッドの端に腰掛けた。

「えーと、ベアトリーチェさん？」

「はい」

「ねえちゃんとアレイさんはどこにいるの？会いたい」

「もう大丈夫なのですか？」

「うん、平気だ」

服は寝巻きのようなものに着替えさせられていた。当たり前だ、着ていた服は血で真っ赤に染まってしまっただろう。

足を地面についてみると意外なほど簡単に立ち上がった。

そうだ。自分のダメージは左腕だけだったはずだから。

「ご案内いたします」

「ありがとう」

ベアトリーチェさんに続いて部屋を出て、長い廊下を歩き出した。

「紹介がまだだったね。おれはラックグリス。今度新しくレメゲトンになったんだ。今使えるのは、滅びのコインを除いたら第2番目の悪魔アガレスさんのコインだけ」

「よろしく願います、ラック様。私は主に他のレメゲトンの補助を担当します。第10番目の悪魔ブエルはあらゆる怪我や病気を治癒する力を持ちます。第4番目の悪魔サミジーナは死者の魂を呼び出すことができます」

「すごいね！」

「もう一つあるのですが、こちらは契約と言っよりはお友達になった感じですよ。第56番目の悪魔ゴモリ。とても明るくて優しい女性の悪魔ですよ」

「へえ！会ってみたいな！」

「彼女は気さくで、人間が大好きな方ですよ。きっと喜ぶですよ」
ベアトリーチェさんは優しく微笑んだ。

このヒトが癒しのコインを持つのはとても分かる気がする。

ベアトリーチェさんに連れて行かれた部屋ではねえちゃんがソファに座っていた。

「ねえちゃん！」

「ラック！」

思わず駆け寄って抱きついた。

ふわりとした甘い匂いと共に消毒液の匂いが鼻を突いた。

「怪我したの？ だいじょうぶ？」

「大丈夫よ。あなたのおかげで助かったわ。ありがとう、ラック」
褒められて、素直にうれしくて微笑んだ。

頭をなでてもらってニコニコ笑っていると、とても聞きなれたバリトンの声が出た。

「くそガキが間抜け面してんじゃねえ」

「ガキって言うな！」

振り向くと、腕や首に包帯が見え隠れするアレイさんが立っていた。

その痛々しい様子にはっとした。

「だいじょうぶなの？ ひどい怪我したんじゃ……」

「こんなものはかすり傷だ」

「やせ我慢しちゃって」

ねえちゃんはあきれたようにため息をついた。

「このぶんじゃラックと一緒に1週間はお休みね」

「俺はすぐにでも動ける」

「嘘おっしやい」

ねえちゃんの言葉にアレイさんはまた口をつぐんだ。

「ごめんね、痛かった？」

アレイさんに近づいて見上げた。

自分から近づいて、少しアレイさんは遠くなった。

アレイさんからは血の匂いがする。きつとたくさんたくさん血を流したんだろう。

「ありがとう、アレイさん。いつも助けてくれて」
紫の瞳を見上げて、精一杯微笑んだ。

それ以外にできることはないから。

ありがとうにたくさんの思いをこめて伝えたい。

「だから……気がついたように素直なこと言うんじゃない。驚くだろうが」

アレイさんはぼん、と自分の頭に手を乗せた。

その手のひらはすごく大きくて、腕の中に抱えられた時のように安心した。

「アレイさんの手も好きだよ。あつたかくて大きいもん」

気分的にコインの埋まっている左手は使いたくなかったから右手でアレイさんの胸に触れた。

とくん、とくと微かな心臓の鼓動が伝わってきた。

そのリズムは暖かでも安心できた。

「イジワル言わないアレイさんはすごく好きだよ。近くにいると安心するんだ」

手のひらも好き。腕の中も好き。鼓動のリズムも好き。

「だから、どこにも行かないで。ここにいて！」

アレイさんは驚いたように紫の眼を見張った。まるで何かを迷っているかのように見えた。

でもそれは一瞬だけですぐにもとの表情に戻って自分を引き剥がした。

「お前はそこのねえさんに付いていくんじゃないのか？　それが望みだろう」

「うん。それは今も変わってないよ」

「なら俺はいらないだろう」

「おれはねえちゃんの隣にいる。でも、反対側の隣にはアレイさんについて欲しいな」

そう宣言すると、ヘアトリーチェさんは困ったように微笑んだ。

「それはまるで母親と父親のようですね」

「アレイが父親っ!」

ねえちゃんはこらえきれずに笑い出した。

「ほんと、報われないわねえ、アレイ」

「……」

アレイさんはまたそっぽを向いてしまった。

でもどうやらそっぽを向くのも口をつぐむのも自分が嫌いだから
と言うわけではないらしい。それが分かっただけでも十分だ。

嫌われてないと分かったら嬉しくなった。

「あらラック、嬉しそうね」

「うん。アレイさんはおれが嫌いなわけじゃないんだよね?」

「そうね。むしろ……」

「やめてくれ」

ねえちゃんの言葉をアレイさんが間髪いれず分断した。

「俺は帰って休む。くそガキ、お前もとっとと寝ろ」

「ガキって言うな!」

アレイさんの後姿に叫び返したら、アレイさんと入れ違いに一人
のおじさんが入ってきた。

見たことあるような、ないような。

あの口ひげは確か。

「……王様?」

首をかしげながらそう言うと、そのおじさんにはこりと微笑んで
くれた。

「さて、何から聞こうか」

ゼデキヤ王はみんなと同じテーブルに着くと、口ひげを触りなが
らそんな風に言い出した。

特別特徴のない顔だから、その辺にいたら普通のおじさんで見分

けがつかないだろうと思った。ただ、頭の上に重そうな王冠を載せているおじさんだけだ。

「王様は何が聞きたいの？」

「ラック！　ちゃんと敬語を使いなさい！」

「かまわんよ、ファウスト女伯爵。さて、いろいろ聞きたいことがあり過ぎて困っているのだ」

「ラースのことか？」

「ラース？」

「滅びのコインの悪魔のことです、陛下」

ベアトリーチェさんが付け加えた。

「ほう。そのような名で呼ぶのか？」

「ラースがそう言った。おれは少なくとも3年以上前にラースと契約して、今回は実はそのことを忘れてただけだ、ラースは左腕一本でおれを許してくれた」

「左腕一本、というと……」

「うん。一回ラースに左腕食べられちゃった。でも、新しい腕をくっ付けて行ってくれたんだ」

そう言っただけで左腕を見せると、王は驚いたように目を見開いた。

特にコインの埋まっている部分には眉をひそめた。

「なんと……！」

「前例のない処置ですが、特に動作障害などはないようです」

またベアトリーチェさんが付け加えた。

「なるほど、その力でセフィラを追い払ったのだな」

「セフィラ第6番目、ティファレトの力は想像以上でした。墮天の悪魔は天使の前で呼び出せないという伝承も真実のようです。事実、私はクローセルを戦場に呼び出すことができませんでした」

「そうか」

「銀髪のヒトは逃げちゃったよ。天使さんの力で」

「これまでは全く脱獄の気配も天使召還の予兆もなかったのですが、どうやらそれは内情視察のためと思われまます」

「やはり偵察が来ているか。侮れんな」

「今回逃したのは私の過信と油断からです。いかような処罰も受ける所存です」

「いや、今回のことは秘密裏に処理せねばならない。厳罰は与えられぬ。しかも処分としてファウスト女伯爵が休んでしまったらその方が痛手だ」

「寛大なご処置、感謝いたします」

「いやいや」

ゼデキヤ王はそこで表情を引き締めた。

「ところでミス・グリフィス」

「ラックでいいよ」

「ラック、失礼よ!」

「ははは、面白いお嬢さんだ」

ゼデキヤ王はひとしきり笑ってからもう一度深刻な顔でたずねた。

「ラック、君はグラシャ・ラボラス以外に悪魔と契約したか、覚えているかね?」

「んー、それは覚えてない。ラースと契約したってことも忘れてたし」

「そうか」

ゼデキヤ王はそこで席を立った。

「まだ他に気になることは?」

「あ、えーとね、ちよつとだけなんだけど」

「なんだい?」

「おれ、銀髪の上の所にいた天使さんのこと『ミカエル』って呼んだんだ。知らない名前なのにさ。んで、その直後にすごくおデコが熱くなったよ」

今度はねえちゃんの表情がこわばった。

「まるで自分の中にぜんぜん知らない誰かがいて、おれを操ってるみたいだった」

「それに関して、今のところ原因は分からない」

「そう……」

それは、自分の過去とか銀髪のヒトへの執着とか、全部の謎を解く鍵のような気がした。

額の熱さと自分の中にいるヒト。銀髪のヒトの天使ミカエル。そうだ、ミカエルさんは自分をなんて呼んだ？

「もういいかね？」

「うん。また何か気づいたら王様に知らせるよ！」

「それはありがたい」

ゼデキヤ王は優しく微笑んで部屋を後にした。

「ラック、帰りましょう」

「うん！」

でも、今はいいや。本当に疲れたよ。

「帰ったらフルーツケーキを食べましょう。きっとアイリスがすぐに作ってくれるわ」

「ほんと？ アイリスってお菓子作るの得意なの？」

「得意よ。カトランジェの街のカフェのマスターの奥さんに負けないくらいね」

ねえちゃんがにこりと微笑んだ。

その微笑を見て思った。やっと日常に帰れるかもしれない、と。

それはほんのつかの間の夢かもしれないけれど。

「桃がいいよ。真っ白な桃がいつぱいのってたらうれしい」

「はいはい、帰ってアイリスにお願いしましょうね」

ベアトリーチェさんにさよならして、ねえちゃんと手をつないでパラデイソ・ゲートを後にした。

次の朝はパツチリ眼が覚めた。

ねえちゃんに連れられてアレイさんのお屋敷にお邪魔した。

でも、どうやらアレイさんはまだ眠りこけているらしい。

「全く仕方ないわねえ。ラック、起こしてきて」

ねえちゃんはお構いなしに自分一人をアレイさんの寝ている部屋に放り込んだ。

思ったより飾りの少ない殺風景な部屋で、剣とか槍とか武具がたくさん置いてあった。自分がもらった部屋みたいにドレスサーはなかったけれど、全身が映る大きな鏡があった。

明るい日が差し込む窓際のベッドからつややかな黒髪がこぼれていた。

窓からはだいぶ夏に近づいた風が吹き込んでくる。

ゆっくりベッドに近づいたけれど、アレイさんが動く気配はなかった。

「おはよう、アレイさん。遊びに行こうよ。起きて？」

反応はなかった。

「ねえ」

ぱっとシーツをはぐと、アレイさんの体が現れた。

それを見て、思わずはっとした。

上半身にたくさんさんの包帯が巻かれている。胸から腹にかけて、そして肩から腕にかけて。

アレイさんはやっと自分に気づいてうつすらと紫の瞳を開けた。

「……痛い？」

恐る恐るそう聞くと、アレイさんは眠そうに答えた。

「少しな」

その言葉で胸が痛んだ。

ベッドの脇にかがんでそっと包帯に触れる。

「ごめんね。ありがとう」

「それは……昨日聞いた」

アレイさんが自分の腕を掴んだ。

戸惑っている、強く引つ張られてベッドの上に倒れこむようにバランスを崩した。

「うわっ」

アガレスさんの元へ行く前にそうしてくれたように、アレイさんは自分を腕の中に大きく包み込んだ。

びっくりしたけれど、背に当てられた大きな手のひらの感触が心地よくて、思わず微笑んだ。

また耳元で心地いいバリトンの声が響いた。

「俺のほうこそ……謝らねば」

「どうして？」

「お前を守れなかったから」

アレイさんは自分の左手に触れた。手の甲には滅びのコインが嵌め込まれている。

「目の前で左腕を悪魔に砕かれた……俺にはどうすることもできなかった……」

「ラーズはちゃんとおれに代わりの左手をくれたよ」

「でも、痛かつたらう？」

アレイさんの声はとても悲痛な響きを含んでいてなぜだか胸がいっぱいになってしまったから、答える代わりにぎゅっとアレイさんの肩にしがみついた。

「怖かつただろう。すまなかったな……」

今まで聞いたことのないくらいやさしい感情を含んだバリトンの声は心の中までしみこんでくる気がした。

額を強くアレイさんの肩に押し当てた。声が震えるのは止められなかった。

「怖かった。おれの体が……おれの体でラーズは銀髪の人を殺そうとしたんだ。血がいっぱい出て……鉄の味がして……」

体の芯から震えるようだった。あの時すら忘れていた恐怖が戻ってきて、息もつまくできなくなるくらい混乱した。

痙攣するように震えた肩をアレイさんが優しく抱きとめてくれた。「怖かったよ……アレイさん。すごく怖かった……」

「よくがんばったな……ラック。」

その言葉で堰を切ったように涙が溢れ出した。

いつもあんまり泣かないようにしてるのに。ねえちゃんが困るから。わがまま言うとなえちゃんに嫌われるかもしれないから。

でも、もう止まらなかった。

アレイさんは何も言わずにずっと大きな手のひらで頭をなでてくれた。

触れたところから体温を感じるうち、少しずつ落ち着いた。

泣いている間アレイさんは何も言わずに自分を大きく包み込んでくれていた。

一度泣いてしまうととてもすっきりした。

「よく泣いたな、くそガキ」

「ガキって言うな」

言い返したけど、泣いたところを見られた手前あまり強く出られなかった。恥ずかしくてアレイさんの顔を見られない。

「だいたい、遊びに行くために呼びに来たんだよおれ」

「そうなのか？」

「そうだよ！」

アレイさんを見上げると、紫の瞳はいつもと違ってとても優しい色をしていた。

明るい陽の元で見るアレイさんは、本当にきれいだと思った。銀髪の人を初めて見たときみたいにドキドキした。

優しく微笑んでくれるのは初めてだったからその笑顔に見とれてしまった。

「今日くらいゆっくり休んでもいいんじゃないのか？」

アレイさんの腕の中で、珍しく優しい言葉をかけられて、たくさん泣いて疲れていた。

「そうだね」

きつとここは世界で一番安心できる場所だから。

目を閉じて、つかの間の休息を味わうことにしよう。

アレイさんの唇が涙に濡れた目元にふれた気がしたけど。

ねえちゃんの声が微かに聞こえた気がしたけど。

全部どっちでもよかった。

窓からは暖かで爽やかな風が入り込んできて髪を揺らしていた。

とにかくこの場所は幸せで、

今はその安心と幸せをいっぱいにして眠りたかったから。

たとえばこの先ももっともっと怖い出来事がたくさん待ち構えていたとしても

．．．おわり（後書き）

t o b e c o n t i n u e d . . .

この物語は連作です。

【LOST COIN】（本作）
de . s y o s e t u . c o m / n 3 6 6 5 c /
【LOST COIN】 http : / / n c o
【LAST DANCE】 http : / / n c
ode . s y o s e t u . c o m / n 4 0 8 2 c /
【LAST DANCE】 http : / / n c
ode . s y o s e t u . c o m / n 4 6 1 7 c /
【LAST DANCE】 http : / / n c
ode . s y o s e t u . c o m / n 6 3 2 4 c /
【LAST DANCE】 http : / / n c
ode . s y o s e t u . c o m / n 7 8 9 9 c /
【LAST DANCE】 http : / / n c
ode . s y o s e t u . c o m / n 0 9 2 1 d /
【LAST DANCE】 http : / / n c
ode . s y o s e t u . c o m / n 0 9 7 3 d d /

順にお楽しみください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3660c/>

LOST COIN -head-

2010年10月8日12時47分発行